

丸山傳太郎の中国伝道をめぐって

—清末・民国初期—

金丸裕一

I はじめに—研究史と史料の在り方—

丸山傳太郎（1872～1951）は、日本人として初めて中国伝道に着手した牧師として知られる。だが実はその生涯には、いまなお不明な部分も多い。1920年代初頭において既に、同志社神学校卒業後に着手した北海道インマヌエル郷での開拓伝道から清国伝道（1903～1913）に転じた経緯、更に失意の帰国（1913）後に着手した留学生支援事業まで、主な活動の概要が提供されている⁽¹⁾。また戦前に刊行された日本基督教会の通史においては、日清戦後に着手された「新領土」台湾伝道に続く「北支伝道」の担い手として丸山の動向が描かれた⁽²⁾。さらに新聞報道や回想を中心とした史料集においても、彼の事績に相当の誌幅が割かれている⁽³⁾。その影響もあってだろう、戦時中に刊行された比屋根安定（1892～1970）による中国キリスト教史の通史は、「日本人の支那に於ける基督教事業」の嚆矢として、清水安三（1891～1988）に先駆けた存在たる丸山傳太郎の半生を描くのであった⁽⁴⁾。

戦後のキリスト教史研究においても、彼の名前は度々登場している。例えば戦後初の本格的通史である土肥昭夫の作品は、北海道開拓とキリ

スト教との関係性を検討する際に、丸山らによる今金の開拓伝道の事例を語った⁽⁵⁾。北海道関連では、白井暢明による労作もある⁽⁶⁾。また近年の日中キリスト教関係史の文脈においては、山口陽一⁽⁷⁾による論考を嚆矢に、中村敏⁽⁸⁾や渡辺祐子⁽⁹⁾による通史的研究が、中国伝道の先駆者たる丸山を明確に指摘した。但し、これら戦後の研究において明かされた史実は、実は前記した戦前・戦時期における文献の水準を超えていないのではないか。本稿のタイトルたる「中国伝道」に引き付けて述べるならば、丸山傳太郎が如何なる想いや目的で現地と向き合っていたのかという内面史的問題、あるいは彼の生涯の半分を占める帰国後における「中国伝道」の実態については殆ど解明されていない、と看取されるのだ⁽¹⁰⁾。

これは恐らく、現存する史料の制約が大きく関係していると思われる。一言でいえば、キリスト教史研究にとっての定番である教界誌紙において、丸山は余り多くの文章を書いていない。加之、①中国伝道を機に組合派教職から日本基督教会へと転籍したこと、②活動拠点も北海道から華北・満洲に移り、更に1913年夏以降は東京へと移動したこと、③中会あるいは各個教会との関係も薄かったこと⁽¹¹⁾、④更に東京時代の主要な働きの場であった「留日中華基督教青年会」や「翠松寮」が火災や戦災で大混乱したこと、などが史料を乏しくした要因と史料される。

他方で近年、日本近代史や中国近代史の研究が深化する中、丸山が史書に登場する機会は明らかに増加した。その場面はといえば、同志社時代の様々なエピソード発掘に始まり⁽¹²⁾、若き日々の北海道における活動⁽¹³⁾、クリスチャン政治学者・吉野作造(1878～1933)の同労者としての姿に加えて⁽¹⁴⁾、時に早稲田に留学した李大釗(1889～1927)を下宿させて多くの人物を紹介した親切な牧師⁽¹⁵⁾、また関東大震災時に虐殺された王希天(1896～1923)ら在日中国人の友としての活動⁽¹⁶⁾、孫文(1866～1925)の追悼会を東京で開催した知中派人士としての活

躍⁽¹⁷⁾、更には日本の対中国麻薬輸出に反対するキリスト者としての活躍であるが⁽¹⁸⁾、近年では満洲伝道会成立を企てた宗教「侵略」の当事者であるとの論難も見られる⁽¹⁹⁾。しかしながら、何れの研究においても残念ながらエキストラ的な役割に留まり、彼の人生そのものに対する関心は、余り持たれていないという印象は否めない⁽²⁰⁾。

以上のような研究史的現状から、本稿では三つの方法論的な課題を設定する。

第一に、丸山傳太郎による中国伝道の内実に肉薄すべく事実関係を編年史的に究明すること。この際、彼自身によって作成された史料を出来得る限り発掘・分析する基礎作業を行い、その梗概を読者に呈示したい。

しかし第二に、全体的に史料が少ない状況を顧みて、周辺部で記録された諸文献を積極的に利用しながら、彼の働きをとりまく諸問題を明らかにすること。特に、登場する個人や組織は可能な限り固有名詞によって示し、福音宣教史における個人の役割を思索するための一助とする。

これらを通じて第三に、従来の研究では空白に等しい1910年代以降の活動実態を議論するための基礎的な材料を提供すること。登場人物についていえば、生没年や立ち位置の記載は煩雑な印象を与えるかも知れないが、年齢や社会的関係などを含め、時代の中に彼／彼女らを定位させんがための試行である。

丸山による伝道スタイルは、実は若き日々の中国においてその方向性が凡そ確定したのではないかという印象を、筆者は抱いている。この仮説を検証するためには、本稿で扱う清末・民国初年における活動の精緻な考察を出発点とせねばならない。かかる諸課題に対する確認を済ませたいま、さっそく丸山傳太郎牧師の姿を求めて、120余年前の中国へと旅立ちたいと思う。

Ⅱ 天津・保定時代—1903年～1904年—

〈前史〉

日清戦争の敗北や義和団排外暴動によって混迷を極めた中国に対して、日本基督教会が伝道の必要性を認識して即行動に向けた準備を開始したのは、1902年秋の事であった。若くて無名の丸山傳太郎が植村正久（1858～1925）の一本釣りによって推挙された云々の数奇な物語については先行する諸研究がこぞって指摘する。だが二人の関係性のみによって中国宣教第一号の出現を説明するには、かなりの無理があると思われるので、先ずはこの点から詳細に解き明かしてみよう。

日清戦争勃発直後の1894年9月、既に明治学院総理に転じていた牧師・井深梶之助（1854～1940）は「支那国に加えられたる打撃は、即ち本邦に於ける不健全なる漢学即支那主義に加えられたる打撃」であり、「是れは本邦社会改良の前途に大いに影響あるなり」⁽²¹⁾と、「義戦」の意義を説いた。

植村正久もこの時期、次のような信仰的世界観を述べる。すなわち、中国における福音理解は余りに現世的であり「理想の要素に於て欠る所多し」と欧米人が評する通りであろう。他方、日本人民は「理想に熱衷する」という「先天的の性質」があるにも関わらず、「其の成功に慢じ、現今の日本に誇るのみにて其の欠点を指摘するを嫌ひ、新文物新道徳の加入を忌む徒は日本的精神の賊」である。そして「最も理想的なるべき基督教徒にして、国家の歴史にのみ心酔し、其の既に獲たる誉れに満足し、十字架の福音に由りて此の民を罪より救うの必要を説くことを怠たるは、此れ天国の主義と日本の国粹とに対して、不忠なると謂はざるべからず」⁽²²⁾、と。

こうした日本基督教会名流の自他理解からの影響も受けてだろう、日

疋信亮（1858～1940）は軍務で訪問した中国において、奮闘する中国内地会宣教師たちの姿に接して感銘を受けた旨を述べる⁽²³⁾。『福音新報』紙上では、没して間もない新島襄（1843～1890）が日本における啓蒙のみならず「愛国心なき支那人の惰眠を覚さんとして、苦心惨憺」していた旨のエピソードも紹介され⁽²⁴⁾、更に「支那改革の曙光」という「好気運を善導して、着々其の進歩を遂はしむることは、差当り先進文明国の責任と云はねばならぬ」と、自らに課せられた使命を確認するのであった⁽²⁵⁾。

他方、3000人余りの在留邦人が生活する上海においてすら日本語教会は存在していなかった⁽²⁶⁾。1901年6月から1902年9月にかけて華北に滞在した細川瀏（1856～1934）による報告では、欧米ミッションによる旺盛な活動に比して見劣りする日本側の状況が語られ、「日本人の集会は極めて微々たりと雖も前途の望み多し」と看做された天津伝道を如何に進めるかについて、問題が提起されている⁽²⁷⁾。

※ ※

台湾伝道に着手した後の日本基督教会においては、如上の機運を背景にしながら新しい宣教ターゲットとして「清国」に対する関心が沸き上がった。そして1902年10月10日より東京・新栄教会において開催された大会において、翌年の伝道局予算7500円のうち8%、合計600円を清国伝道費に充当する案件が、満場一致で可決されたのである⁽²⁸⁾。

「清国伝道」の意義について、日基の公式見解では「亜細亜の伝道殊に清韓の教化は其の責任日本基督教徒の肩に懸れりと謂ざる可らず」と⁽²⁹⁾、先にみた総論的枠組みが繰り返し述べられる。こうした中、1903年2月22日に天津に入った貴山幸次郎（1865～1940）による報告は、たいへん興味深い。すなわち、日疋・細川の天津到着を契機に開始された集会が徐々に拡大し、また小学校や青年会を組織した基礎の上に、教会建設を進めようというのである⁽³⁰⁾。貴山は瀬川浅（1853～

1926) と共に北京においても伝道方針を練るための視察を行い⁽³¹⁾、次のような展望を示した。

清国伝道とは、単に在留邦人だけを対象にすれば済むものではない。なんとなれば第一に、既に欧米宣教師による熱心な伝道活動が行われて来たものの、彼らは「到底容易に中等以上の清国人に伝道し得ざるの事情」があり、「彼等も将来は吾国信徒が漸次其方面に着手伝道するに至らんことを望み居れり」という背景が存在する。第二に、清末日本ブームの結果、「清国青年は大抵我が学士博士の教授を受け、当路の大官亦た多くは我国の顧問に学ぶ」という現実もみられる。さらに第三に、「我等は清国人とは同文同人種の間柄にして、而も衣食住等に於ては容易く同化一致し得べき傾向を有すれば、真に彼等の友となり彼等を教導するには、此上なき屈強の好位置」にある、と。この時点において、丸山傳太郎は「清国人」担当の教職として漸く姓名が明かされ、また在留邦人担当の牧師は別途立てる旨が予告された⁽³²⁾。

こうした前史を踏まえて初めて、丸山傳太郎「一本釣り」説の背後に見え隠れる様々な思惑を、わたくしたちは思考することが可能となるのである。

〈1903年〉

1903年4月17日午後6時30分、同志社講堂において丸山の送別会が開催された。先ず貴山が「北清に於ける日支両国民伝道の急務」と題する講演を行い、続いて丸山は「清国伝道の目的」を演説した。同窓の吉田清太郎(1863～1950)による送辞を受けて丸山は、次のように答えたという。「余が伝道の目的は、基督教の外救ひなきことを警告すると同時に、彼等をして同胞救済の急務なるを自覚せしめ、相偕に携へて教化の任を完ふせんとするに過ぎず。余は彼等を使ふ為に到らず。彼等の伝道を補助せんために行かんとす。而して余は清国伝道の結果を三代の後に見んことを期せんとす」⁽³³⁾、と。

同じ時期に丸山は、古巣・組合派の機関紙にも、次の一文を寄せている。「天父の聖旨を奉じ人類の至情を以て克く之が天職に当り得るもの、又当らざる可からざるものは、我々日本の基督教徒」である。浅学菲才な自身はただ「自由教育、自治教会、両者併行、邦家萬歳の主義を持して友誼的応接を支那同胞の間に試みんとする」だけであるが、「さなきだに日本が支那に対する従来 of 精神行動、其天職を守るにあらずして、却て罪過を犯し他を煩はし自らを辱めたる事なしとせず。日本の罪過は吾人皆之を負はざるべからず。故に或意味に於て生が此行、罪過の幾分を償はんと欲するものなり」⁽³⁴⁾。

先に紹介した如く、井深が見た反面教師としての中国、植村がいう戦勝気分に乗られて己が罪性を忘れた日本人、各々が体験や観察を通じて中国伝道の必要性を説いた人々の中で、丸山はより鮮明に日本が中国に対して犯した罪過を自覚していた。念願の成就を手放しで歓喜できるような天津赴任ではなかった心性史的な原点を、ここで確認しておきたい。

1903年4月23日に神戸を出帆した丸山は、長崎・芝罘を経由して30日に太沽に到着、5月1日には天津に到着した⁽³⁵⁾。だが日基天津教会では先立つ3月15日に設立式が挙行され、日疋信亮ら長老も選出されていた⁽³⁶⁾。後述する通り、主任伝道者たる彼が直面した難題は信徒からの拒絶であったと、設立に深く関わった伝道局幹事・貴山幸次郎は後年に回顧した⁽³⁷⁾。だがこの叙述は、直前に『福音新報』で貴山自身が語った「清国人」担当牧師という位置づけと、明らかに矛盾している。恐らくは、記憶が変形されたのだろう。

6月11日付で丸山は、天津・川本竹松（生没年不明）宅に寓居しながら活動している旨を報告する⁽³⁸⁾。この川本竹松とは、川本政之助（生没年不明）・松尾音次郎（生没年不明）兄弟の末弟で、同志社出身であるのみならず北海道利別インマヌエル村入植の経験も共有しており、函館税関勤務を経て実業界に転じた人物だ⁽³⁹⁾。かかる旧知の人間関係に

支えられながら異国での活動を開始した丸山の姿が、見て取られるだろう。爾來、丸山による報告の内容は単に天津教会の状況のみならず、中国青年会の動向・欧米ミSSIONの活動・北戴河で開催された中国教職者夏期修養会の状況・カトリックの現状・避暑地の芝罘における宣教師間の交流等々多岐に及ぶが、自ら進んで青年会学校の日本語講師に就いたこともアピールされた⁽⁴⁰⁾。

この時期の天津教会の動向をみると、1903年9月に瀬川浅牧師が赴任した後、「礼拝式安息日学校」以外の催しは日本租界内の瀬川宅に変更され、洗礼志願者を瀬川、信徒求道者を丸山、英語聖書を青年会幹事のゲリーが分担したと報じられる⁽⁴¹⁾。

〈1904年〉

1903年のクリスマスに、丸山は天津を離れて保定へ向かい⁽⁴²⁾、翌年1月には同地の「南関臨清館に寓居」した⁽⁴³⁾。後に纏められた史料には、植村正久による推挽があったにも拘らず、天津日本基督教会は丸山を拒絶したと記す。また彼は「神中心の支那本位の伝道」を進めるべく「すべてキリストによれる丸山の自由に一任された」と申し出た」云々と強気であり、伝道局から支給された年間1000円の手当に加え、朝鮮・鎮南浦電気株式会社専務取締役だった前出の川本竹松による個人的庇護を受けた、ともいわれる⁽⁴⁴⁾。かかる叙述は、丸山の天津赴任に際して「誰か相当名の知れた日本基督教会の牧師が遣はさるゝもとの予期せられた日疋氏は一寸意外に感ぜられたと見え、率直なる氏は是迄名前も聞いた事もない北海道の熊やら猿やら分らぬ丸山氏にてはと、少々機嫌を損じて充分信任せられぬため、丸山氏は間もなく自ら辞して」天津を離れた旨の貴山幸次郎による突き放したような回顧と⁽⁴⁵⁾、見事に平仄が一致する。

しかしながら同時代の史料によれば、やはり実態は少々異なっていたようだ。すなわち、「清語研究上一層の便宜を得んため保定府に転住す

る事」となった丸山のため、1903年12月23日に瀬川牧師や川本長老ら「出席者廿余名近来に稀なる好集会」が持たれた。この記事において保定は「直隸省の首府にして省庁及び諸衙門所在地」であり、「米国長老派と組合派の伝道地にして先年拳匪の乱の時には数十の信徒殉教したるに闕はらず教勢は日々に旺盛なり。同府に日本人六十余名居住する由なれば丸山氏は我が同胞にも伝道する門戸開かるべし」とされ⁽⁴⁶⁾、丸山による新天地における邦人宣教機会の到来と説かれる。

尤も、翌年出版の日基伝道局による報告には「清国保定府ニ在リテ清国人ニ伝道」⁽⁴⁷⁾と一言あるのみで、これが果して「栄転」なのか「左遷」なのか、あるいは当初からの予定通りだったのか、いまひとつ評価は下し難い。

Ⅲ 営口時代—1904年～1908年—

ところが1904年の盛夏、丸山傳太郎に千載一遇の機会が到来する。1904年2月に勃発した日露戦争の展開にともない、6月になると現地総司令部たる満洲軍が設置された。いよいよ旅順攻撃や遼陽会戦を迎えんとする段階で、食糧・武器弾薬・牛馬・飼料・軍事物資・日用品・石炭・苦力手配等々、満洲軍将兵総勢30万人の軍事・生活物資全般と物流を支える満洲軍倉庫が組織される。そして8月2日、これ迄にも度々登場した清国通軍人兼日本基督教会有力会員の日正信亮が総責任者たる倉庫長に就任した。丸山を天津教会から追いやったとされる日正はしかし、保定にあった彼を通訳官として呼び寄せたのであった。

この経緯について日基側の記録は、専ら宣教史的な角度からの描写に努める。すなわち、「本月ヨリ満洲軍倉庫ノ清語通訳官トナリ営口ニ移転シタレバ同地方ノ伝道ヲ委託セリ」⁽⁴⁸⁾といった事務的報告だけではない。大連赴任に先んじて日正が同道する信徒を募集した結果、十数名が

これに応じた。任用後は大連の本部内において礼拝や祈祷会を守った、と語る⁽⁴⁹⁾。因みに、丸山が配属された営口支倉長にも、市ヶ谷教会員の金子義友（生没年不明）⁽⁵⁰⁾が抜擢された。要するに、日正が計画的にキリスト者を招集したというのである。日清戦争以降の対外進出に際する風紀紊乱、飲酒・買春などの問題をめぐって、国内キリスト教界が一大運動を起こした前史を意識すれば、軍隊においてかかる「修養」や「道徳」を重んじる施策を選択した可能性は高い。事実、YMCAによる天幕事業などは「健全なる快樂を供して其腐敗を防ぐ」目的が叫ばれている⁽⁵¹⁾。まさに、丸山の従軍チャプレンの側面の強調と呼べるだろう。

1904年末、「丸山傳太郎氏は此程陸軍なる高等通訳として営口に赴かれしこととなるが、満洲軍倉庫長日匹信亮氏を始め、営口支倉庫長金子氏外数名の信者ありて毎朝食前に将校会食室にて有志の聖書研究及び講話会を開き、日曜日夜は一般の有志者に説教しつつあるといふ」旨の動向が報じられた⁽⁵²⁾。その後もこの三名の活動は時折伝えられ⁽⁵³⁾、1905年末の貴山による報告でも営口は「丸山通訳官主任者として専ら伝道せらる」⁽⁵⁴⁾と見做されていた。他方この期間、天津教会牧師だった瀬川浅は、かなり気になる記録を残す。すなわち、同年10月の営口出張報告において「該地の信徒は過日伝道局に伝道者派遣を依頼したる故頻りに其の来任を待ちつつあり」と明記したのだ⁽⁵⁵⁾。丸山を「伝道者」として受入れたくない感情の反映なのであろうか。詳細を復元する術は無いが、何かしらの摩擦が発生していたのかも知れない。

他方、満洲軍倉庫の活動を総括した全11冊、合計5000頁を超える業務報告書では、1904年9月24日の条に「通訳丸山傳太郎青泥窪ニ到着ス。依テ、営口支倉附ヲ命ス」⁽⁵⁶⁾とあるも、具体的活動の詳細は未だ発見できていない。但し、他の通訳や雇員は物流や物価などに関する調査報告をまとめており、また時折「土人ノ言ニ依レバ」云々という表現も見られるので、彼もまた通訳として類似した現地とのパイプ役的な職

務も担当していたと思料される。更に1905年1月21日、丸山に営口支倉に附設する営口搗精所職員を命ずる記録も残る⁽⁵⁷⁾。

〈1905～1906年〉

ただ戦勝後の1905年10月12日の条に、興味深い叙述がある。すなわち丸山傳太郎は「(明治)三十八年九月以来、営口支倉ノ通訳トシテ集積作業、関外鉄道並遼河水路輸送業務及各軍ノ軍需品委託購買業務ニ関シ、同支倉ノ業務執行上多大ナル便宜ヲ与ヘタル者ナリ」とされ、「高等官待遇陸軍省雇員ヲ命ゼラレ度……遼東兵站監へ稟申セリ」⁽⁵⁸⁾というのである。同じ時期、遼陽でのYMCA軍隊慰問事業における講演についても報告されるが⁽⁵⁹⁾、本務は通訳だったと見做すべきだろう。翌1906年2月22日、この推挙は関東都督府より「定員ノ関係上詮議不相成旨ヲ以テヨリ返戻相成候條御承知相成度」⁽⁶⁰⁾と却下されたが、何れにせよ「高等官待遇」に該当すると高評価されたのであった。1906年4月19日には「雇傭者ハ採用地ニテ解傭ス」との方針が固まった⁽⁶¹⁾。1906年3月半ば以降、戦勝によって多数の信徒や求道者が凱旋帰国しただけでなく、石田祐安(1865～1907)牧師や応援者が相継いで離任した内紛に悩む大連教会において「礼拜説教、聖書の講義は満洲倉庫通訳丸山傳太郎氏に囑託し居れり」⁽⁶²⁾という記録もあるので、軍務を継続しながら残留していた可能性が高い。

日基側記録によれば1906年5月に「丸山傳太郎氏満洲伝道の用務を帯びて下旬上京一ヶ月滞在して種々尽力す」⁽⁶³⁾、とある。より詳細に追跡すると「公暇」中の丸山は、先ず神戸に到着した⁽⁶⁴⁾。東京滞在後に北海道へ向かい、6月20日に再度上京するも26日には離京、30日に神戸を発って岡山経由で門司から大連に帰任したという⁽⁶⁵⁾。この年には北陸伝道などで活躍したアメリカ長老会宣教師のトマス・ウイン[Thomas Clay Winn](1851～1931)を日正が満洲に招聘した動きもみられるが⁽⁶⁶⁾、丸山は日基宣教師で大正改訳聖書の委員だったジョ

ン・ダンロップ [John Gaskin Dunlop] (1867 ~ 1932) や貴山とともに、大阪・川口のウイン宅に出向いて満洲行きの交渉を担ったと証言されている。丸山の言を借りれば、「世界的大戦役の後に於ける軽からぬ道義的責任を思ひ、単に日本対満洲の問題たるに止らず、広く世界大方と連接せる要港の精神的機関に伴ひて、相応しき指導者たり代表者たり参与者たるべき良牧師」を獲んがための一大任務であったという⁽⁶⁷⁾。

ところで丁度この時期、丸山自身の手による中国プロテスタント伝道百年に向けた一文があり、中国キリスト教観や日本が担うべき役割などが手際よく纏められている。すなわち、英華字典や中国語訳聖書がモリソンの手によって作成されたのみならず、「日本の伝道乃至開化が支那伝道開始の余波」として開始されたという認識が、大前提として明示される。そして、「此次の大戦役により愈々切に東洋の木鐸との世界に大使命を有する……日本が自他の為に宜しく此一世紀の恩寵を記念して、近年頻りに式を日本に学ぶ所あらんとする支那に対し伝道問題解決に当るべき」という使命感を語る。中国と比較して後発だったにも関わらず「既に独立自任の時代を来すことを許された所の日本の基督教徒は、当然上天の聖旨を奉じ深く支那に同情を及ぼし、又宣教師の素志を助けて、同国に於ては健全なる基督教の布殖発達し応援せねばならぬ」という理屈だ。具体的には、教会合同・キリスト教主義大学の設置・聖書改訳の事柄などで、「真に支那人士のもの」が出現することを手助けせよという呼び掛けであった⁽⁶⁸⁾。

1906年8月中旬の井深樞之助の来訪に合わせて開催された牛荘YMCA、及び営口日本基督教会の設立式典において、丸山による感謝祈祷や牧師就任式司会が報じられる。前者の場合、「牛荘基督教青年会は其の国籍の何れにあると將た信者なると未信者なるとを論ぜず如何なる青年も自由に入会するを得べき」と特記されるので、丸山の伝道上の姿勢が反映された結果と見る事もできるだろう⁽⁶⁹⁾。何れにせよ、1906

年の一時帰国に際して日基伝道局が与えた「伝道上の用務」の内実は、ほぼ明らかになったと思われる。

なお、1906年12月時点の満洲各地の見聞記は、邦人数3000余名を数える営口には「戦時中青年会慰労部あり、又丸山傳太郎氏満洲倉庫に通訳として在勤し、鋭意精神的訓練に尽瘁せし為にやあらん、当地に於ける基督教の勢力は益旺盛」⁽⁷⁰⁾と、その働きを評価する。同年末には在留邦人の子女など110人を招いたクリスマス会を催したという証言もあり⁽⁷¹⁾、更に牛莊（営口）領事・窪田文三による報告によれば、丸山は1906年12月以降同地に在住と記録されている。これによれば「牛莊基督教青年会及営口教会創立委員トシテ各地方巡遊」しながら、「道義的合理的基督教ノ伝道」を行い「毎日曜教会堂ニ於テ説教及祈祷ヲナス」傍ら、青年会夜学校で英語と「清語」など約20名の「土地青年ノ為メニ必要ナル科目」を教授していた。既に40名が卒業乃至修業しているが、信徒は日本人のみ約20名とある⁽⁷²⁾。丸山が念願としていた中国人への伝道がたいへん困難だった状況について、領事報告の行間に浮かび上がってくるだろう。

〈1907年～1908年〉

1907年5月、上海で開催された中国伝道百周年記念集會に丸山は参加した。『福音新報』は相当な紙面を割いて百周年の重要性を説き、それらは丸山によって執筆されたと推測できるのであるが、残念なことに無署名記事である⁽⁷³⁾。従って、以下では確実な素材に依拠しながら、その思いを探ってみたい。

欧米による中国伝道が日本にとって持った意味について、丸山は次のように説明する。一年前の06年夏に帰国した際、日本からの参加を広く呼びかけたが、「万一出席者なきが如きことあらんには千載の遺憾なりと感じ、敢て自ら憚らず個人として参会」した、という。だが、「外国宣教師の來集するもの約千二百名、日本より來れる外国宣教師前後

四十名に達せしにも拘はらず、日本人としては単に余一名に過ぎざりしは驚くの外なし」と嘆く。一連の報告において注目すべきは、次の二点であろう。

第一は、既にみた日本教界の中国への無関心に対する落胆である。与えられたスピーチ時間が短かったため、彼は次のようなメッセージを文章で提出した、という。「日本は今次不幸にして何等正式の使節を此大会に派遣することを得ざりしかども、余は懇ろに諸君に望む、昨日本に於ける万国学生基督教青年大会の開催と救世軍ブース大将に対する国民的歓迎とは、適々以て遙かに此大会に祝意を表するものとして甘受せられんことを」。そして第二に、中国における宣教現状に対する危惧もあげなければならない。「此大会が全然欧米宣教師の手に処理せられて支那信徒の更に（少くとも表面に於て）参与せざりし」状況は、「支那諸教会今日未だ自給独立の域に達せずして、尚殆んど外国宣教師の教会たる如き」であるが、これは逆説的に「支那の大にして将来に富む所以」なのである⁽⁷⁴⁾、と。欧米のキリスト教を相対化するためには「日本的」なるものを意識するだけではなく、先んじて存在した中国における経験に学ぶ必要性を説くとともに、同時に中国側の「自給自立」をも待望した丸山の論理が看取される。

但し丸山の宣教師観は、単に自立を妨げる存在といった単純な認識ではない。1908年2月に発表されたティモシー・リチャード [Timothy Richard / 李提摩太] (1845～1919)⁽⁷⁵⁾ についての紹介に、その一端を探ってみよう。この記事は先ず、同年に日本を訪問したリチャードの「来朝の趣意并に其影響如何には頗る注意を値する」との呼びかけから始まる。丸山は、1904年5月の「北支那公理諸教会総会」（会衆派教会総会）、及び1907年5月の「支那宣教百年大会」で「一言の挨拶を交えた」というので、披露される内容は書籍や伝聞から知り得た情報である。記事はリチャードの中国における活動を編年体形式で概観するも、

注目すべきは単なる宣教的関心を越えた事績への言及であろう。例えば、主筆となった新聞の論説が他紙に転載されたこと、広学会による「書籍雑誌の新思想は克く各省学生の間に感化を与へて、大なる革新運動を」呼び起こしたこと、「拳匪発生の主因たる無識を一掃する」ための大学創設などであり、特に広学会の事例は詳細に報告している⁽⁷⁶⁾。要するに、世論形成や社会変革における貢献を、丸山は評価していたのだ。中国伝道とは、単なる宣教的側面の追究のみに非ずという思いを、強く感じていたと思われる。

なお、1907年における丸山が相当多忙であったことを窺わせる記録があるので、簡単に紹介しよう。『福音新報』紙上には営口YMCAで石原保太郎(1858～1919)とともに尽力する姿に加え⁽⁷⁷⁾、恐らくは上海出張の途次であろうが上海日本YMCAにおける司会や講演⁽⁷⁸⁾、大連教会での代務⁽⁷⁹⁾、「北方」への巡回⁽⁸⁰⁾、そして10月27日には欧米宣教師とともに奉天で伝道⁽⁸¹⁾等々が見え、一箇所に腰を据えてはいなかった。

これと関連してか、翌1908年における人事動向には、次のようにある。丸山は1月に私用で帰国した。同月6日には大阪に立ち寄り、中旬には「再び南清に向かつて出発せらるべし」と見え、帰任先は営口ではなかった⁽⁸²⁾。6月の貴山による報告によれば、営口教会は「久しく主任者なく、加ふるに世間の不景気なる為め、実業家などの他に転ずるもの多く、教会また甚だ振はざる有様」⁽⁸³⁾だった。主任だったはずの丸山が「目下営口に來り伝道し居らるる由」との消息まで案内されているのだから⁽⁸⁴⁾、任地には不在気味だったのだろう。7月末に到り漸く、営口滞在が案内されている⁽⁸⁵⁾。どうやら当該時期は、「南清」あるいは奉天における活動に熱心だったようである⁽⁸⁶⁾。尤も、1909年1月の貴山による営口報告では「丸山傳太郎氏定住して伝道されつゝあり。新市街に青年會館を移し、丸山氏は英清兩國語を教授して居らる。其の他海兵俱

楽部なるものを起さる」⁽⁸⁷⁾と見える通り、再び任地に戻って来たようではあるが。

IV 一時帰国の日々—1909年—

〈1909年〉

ところで、丸山はいつまで営口に滞在していたのか？ 前出の外務省記録は1908年12月に作成されているので、この時期まではある程度
の確証が与えられている。但し、1909年2月28日の吉野作造日記には
「朝教会ニ行ク 丸山伝太郎氏ニ会フ 午後婦人会ノ講演ヲ頼マレ安井
哲子氏海老名先生ト共ニシヤベル 予ハ『清国婦人ノ実相』ニ就テ」⁽⁸⁸⁾
とあり、この時点で東京に滞在しており、組合派・本郷教会での主日礼
拝に参加していた事実を証言している。そこで、例の如く人事動向をみ
たところ、1909年2月17日に帰国・上京したことが確認できた⁽⁸⁹⁾。

ところで、吉野の日記に登場する海老名弾正（1856～1937）は、周
知の通り本郷教会牧師であり丸山にとっては同志社の先輩、安井哲子
（1870～1945）は海老名が洗礼を授けた教育者である。吉野作造もま
た二高時代からのクリスチャンで、東京帝大入学後は海老名を慕い組合
派本郷教会に通っていた⁽⁹⁰⁾。

日本基督教会による通史には、1909年4月に「神田青年会に於て開
教五拾年の祝賀会を開くや、……我が日本基督教会も亦外国伝道に着手
せらるべからずとの議起り、同年開会の第廿三回大会の協賛を経て予算
一千貳百円を可決し同年十一月教師丸山傳太郎を清国の首府北京に派遣
し専ら清国人の間に布教せしめたり」と記される⁽⁹¹⁾。また、同年10月
の日基大会で「清国人の間に伝道せんことを決議」して、翌月に丸山を
北京に派遣したという報告もある⁽⁹²⁾。だが実際はこの期間、かなり用
意周到なる根回しの為された事実が、他の史料によって窺い知ることが

できるだろう。

例えば、井深梶之助の日記には次の通りみえる。1909年3月1日に「神田青年会館ニ於テ府下教役者会ヲ開キ、伝道開始五十年祝賀会伝道並ビニ伝道修養会ノ件ニ付キ打合セヲナス」。3月5日には「貴山幸次郎氏来訪。丸山傳太郎氏ヲ支那人伝道者トシテ北京ニ派遣ノコトニ付キ相談」するも、3月6日夜「青年会館ニ於テ右伝道会評議会アリ。丸山氏支那伝道ノ議アリ。次会迄延期ニ決ス」と先延ばしされた。伝道開始五十年祝賀会自体は3月13日土曜日に開催され「来会者七百名モアリタラン」とされるも、丸山の北京派遣については3月29日「七時ヨリ祝謝伝道実行委員会ニ移リ、丸山傳太郎氏ヲ支那人伝道ニ派遣スルコトニ決ス」とある通り⁽⁹³⁾、伝道局長・貴山による事前折衝もみられ、前回の植村による「一本釣り」ともみなされた選出とは異なっていた。

丁度この最中、『福音新報』には次の如き記事があり、たいへん興味深い。「久しく清国に在りて其の基督教会の事情に精しき丸山傳太郎氏は、此程所用ありて上京せられた」という前置きから始まるインタビューでは、彼の思いが二面の紙幅をもって語られる。

すなわち、「日清戦争以来……清国人は国民的自識が余程発達」しており、「比較的文明的空気を呼吸して居る基督信者は殊にその意識が強くなつた」結果、「宗教的にも清国人自らが教会を經營せねばならぬとの觀念が次第に起つて居る」状況がみられ、クリスチャン人口の急増という現象も指摘される。しかしながら、「独立自給の教会は甚だ少数」に過ぎず、北京・公理教会で親しく交わる任牧師は「余に向ひて日本の基督教会の独立自給せる模様などを尋ね、熱心に研究して居る」と続ける通り、未熟さの指摘も忘れない。話題は満洲伝道の実態にも及ぶが、1908年のリバイバルに対しては「戦争の爲めに一時中止の姿であつた伝道が、満洲の復旧と共に一時に勃興した」結果であり、「道義的分子も多かつたが中には随分極端な懺悔などもあつたといふ。其の後は火の

消えた如くになつて了つた」と冷めた評価を下した。

そして、かかる中国の現状と向き合うためにも、彼は次のような具体的提言を行う。第一に、目前に迫る開教五十年祝会において、中国伝道に遣わされた「宣教師の労を謝する事」のみならず「清国の基督教徒をも請待する」行動を示すこと。第二に、「清国、韓国、及びシヤイアム等の代表者を招きて……東洋伝道の気脈を通ずる為め一つの会を設け、其の連絡を図り、相応援することの出来るよう」な体制を整備すること。具体的には、各国にある「牧師及び有志者を以て一つの会を組織し、外国宣教師を其の客員となし東洋伝道の拡張に力を尽くすことが今日の急務」だと主張するのであった⁽⁹⁴⁾。まさに、「清国通」丸山の知見やビジョンを広く知らしめるための、絶好の場となっただろう。

同じく、3月15日から19日まで東京・富士見町教会で開催された日基伝道修養会の席上においても、居並ぶ教職者を前に「希望と決心」そして「愈よ宿志を成就すべく出発する」よろこびを語る場が与えられた⁽⁹⁵⁾。

これらと軌を一にして、北海道中会の記録にも慎重かつ丁寧な準備過程が見て取られる。1909年6月1日に貴山とともに北海道入りした丸山に対して⁽⁹⁶⁾、同月3日に日本基督北辰教会において開催された第七回日本基督教会北海道中会の場において、教師試験委員・坂本直寛(1853～1911)から「今回伝道局の推薦により近々清国北京に向つて清国人伝道の為め出発せんとする丸山傳太郎君の試験を可とす」との提案があり、可決された。更に新島善直(1871～1943)長老は「右丸山君の按手札を来六月六日の日曜礼拝後北辰教会に於て執行すること及び執行委員は議長を加へて他に二名の教師を議長の指名にて挙ぐること」と動議を提出、可決されるとともに、光小太郎(1865～1924)・坂本直寛・千盤武雄(生没年不明)が按手札の担当となった⁽⁹⁷⁾。この煩雑な推移には、天津・保定・營口で活動していた段階において丸山は、日

基の牧師として立てられていなかったことを意味する。先に見た日正ら信徒との摩擦も、こういった職制面の不備に起因していたのかも知れない。しかるに今次の北京赴任に備えては、任用の手続きや形式まで細かく配慮されたのであった。加之、接手礼後の6月5日に札幌で⁽⁹⁸⁾、19日には函館において開催された開教五十年祝謝伝道の場においても⁽⁹⁹⁾、丸山に講話する機会が与えられていた。

ただし丸山は、組合派を捨て日基に飛び付くような態度は取っていない。『福音新報』彙報欄は、4月1日に「近日北京に赴かるべし」⁽¹⁰⁰⁾と予告した後、6月17日には教師試験合格、及び接手礼執行と併せて「不日清国に赴かるべし」旨を伝えた⁽¹⁰¹⁾。前記した北海道での宣教活動終了後、伝道局は更に丸山を一箇月余り徳島に派遣して、祝謝伝道に従事させている⁽¹⁰²⁾。まさに、用意周到な各地での御披露目だ。同年10月に麴町教会で開催された日本基督教会二十三回大会に、丸山は北海道中会の員外議員として参加しているが⁽¹⁰³⁾、この上京を利用して「丸山傳太郎氏 廿日富士見町教会堂にて小崎弘道氏司式の下に秋田良子と結婚の式を挙げられたり」⁽¹⁰⁴⁾という。ごく簡単な報告に過ぎぬが、ここには彼の絶妙なバランス感覚が見事に集約される。すなわち、式場は日基の名門・富士見町教会を選定し、司式は組合派の重鎮・小崎弘道（1856～1938）に依頼しているのだ。来るべき中国伝道にとっては、彼が当然これまで接してきたであろう自由基督教や新神学の衝撃、あるいは植村・海老名論争といった「神学論争」よりも、むしろティモシー・リチャードが示した如きエキュメニカルな実践こそが重要だという思いの反映でもあるのだろうか。

1909年10月31日の午後には送別会も開催され⁽¹⁰⁵⁾、11月2日には夫人とともに新橋発⁽¹⁰⁶⁾、11月15日に神戸から大智丸に搭乗して再び大陸に向かい⁽¹⁰⁷⁾、末期大清帝国の首府・北京崇文門外鎮江胡同に居を構えたのであった⁽¹⁰⁸⁾。

V 北京時代—1909年～1913年—

〈1910年～1911年〉

日基「新任教師」たる丸山傳太郎の「新伝道地」北京時代は⁽¹⁰⁹⁾、管見の限り生涯で最も旺盛な執筆活動がなされた時期でもあった。私生活でも女兒に恵まれたが⁽¹¹⁰⁾、他方で曾ての任地であった営口の夜学校や日曜礼拝は「熱心な青年の全地を去りしより、目下は万事中止の姿なり」⁽¹¹¹⁾と報告される。重複掲載もあるため厳密なカウントは難しいが、20篇以上の文章が生産されている。内容としては実務的報告が多く、余り面白い文章ではない。例えば各会派やYMCA、在留邦人によるクリスマスや新年祈祷会の状況、「直隸省基督教聯合会」参加記や在北京日本人信徒の動向、「北京基督教聯合会大会」や「北京公理会の社会的活動」の紹介等々、関心事は多岐に及ぶ。記事名などは、附録「丸山傳太郎による著作一覧（初稿）」を参照されたい。だがそれでも時折、無機質な文中に丸山による思考や行動のパターン、状況に対する評価／情念を発見することが可能だろう。

北京到着早々であるにも関わらず、丸山は積極的に各教会のクリスマス礼拝、及び新年祈祷会に脚を運び、或いは伝聞した情報を報告する⁽¹¹²⁾。その中では、単に組織名だけでなく牧師や宣教師・長老など、個人名も多く登場するため、具体的人物を措定し得た場合には、人間関係の状況までもが復元できて豊かな交流の実像をわたくしたちに示してくれるであろうが、極めて煩雑な手順を踏む必要があるため、これは後日の課題としたい。例えば保定時代には「孟」牧師、北京では「任」牧師などが頻出する。また、張伯苓（1876～1951）・誠靜怡（1881～1939）・丁立美（1871～1936）・張佩之（生没年調査中）・袁文芳（同前）・誠敬戈（同前）・陳在新（同前）・高誠齋（同前）・宋發祥（同前）・唐介

臣（同前）・劉芳（同前）などの基督教青年会関係者との交わり⁽¹¹³⁾、陳維屏（同前）・馮希恩（同前）ら若者への関心などは⁽¹¹⁴⁾、次代を意識した結果と読みたい。

これらの観察結果を前提にその特徴を述べると、以下の通りとなる。

第一に、中国伝道の先駆けとしての役割を果たした宣教師に対する深い敬愛の念について。日本にも絶大なる影響を与えた『天道遡源』の著者であり、また国際法テキストとして近代世界への参入を補助した『萬国公法』の紹介者であるウイリアム・マーティン [William A. P. Martin / 丁躋良] (1827～1916) が、ティモシー・リチャードと共に日本に招待される決定がなされた後、北京在住の日本人クリスチャンは高齢の彼に講演を依頼した。その中心となった丸山は早速一文を認め、彼の60年に及ぶ宣教生活を紹介している⁽¹¹⁵⁾。また、ティモシー・リチャードについても再び筆を取り、その略伝を五回に互って連載する。ここで丸山は、三回目の面会となるティモシーに対して「我輩の支那伝道は支那を中心として友誼的になされざるべからずと言ふや、（彼は……引用者）然り、然れども畢竟善の爲め世界の爲め上帝の爲めと言ふに帰着すべしと応じて、熱切我輩の爲に祈り」云々と、自らの初志を再確認するかの如き報告でもある。

これと関連して第二に、宣教師からの「指導」を受けながら成長を遂げた中国キリスト教に関する「最近の自著数冊を頒ちて、自今和談相手たるべきを告げられた」⁽¹¹⁶⁾ とのエピソードを伝える。ティモシーの半生を丁寧に紹介した丸山が発見したものは、義和団の乱など様々な難局に直面しながらも、終始一貫「上帝の大使」としての自覚を持ち続けた「経世的宣教師」の姿であった⁽¹¹⁷⁾。なお丸山は、20世紀初めに世を去ったリチャード夫人の献身的生涯を通じた「感化」について簡述した作品も執筆している。それには「公私支那の爲に尽くされ、又は現に尽くされつゝある日本女流の事に、注意を払はるゝ人々」に向けたメッ

セージの意を込めていた⁽¹¹⁸⁾。

第三に、中国キリスト教に対する期待について。1910年12月に漢口で開催された「支那伝道大会」に、丸山は参加することができなかった。しかるに即座に知り得た情報を伝えるとともに、次の如く評価した。すなわち、「支那の伝道を支那の国情に適せる有効なるものたらしめんが為めには宜しく支那人士之が主導者となり欧米人士は其の従来の経験によりて之が応援者たるべしと云ふ善き新主義に訴へ、支那各省伝道協会の聯絡協同自治共励を目的とせるもの」であった⁽¹¹⁹⁾、と。同じく、1911年の新年祈祷会についても、「昨年と異なる点は司会者が凡て支那人士なりしのみならず前後日曜日の協同礼拝の説教者も支那牧師たりしことなり。欧米人側も昨年と先づ同型なるが、エデンバラ大会の影響と昨今に於ける支那の進運に伴ふ意気込み見えたり」と⁽¹²⁰⁾、些細な変化を見逃さない観察を続けていた。

第四に、かかる信仰的理路を踏まえて、日本キリスト教が中国において果たすべき役割について。日露戦後に旺盛を極めた中国における日本人教習招聘熱や留日熱も冷めかけたのに比べて、欧米の名門大学は中国に進出し、YMCA 斡旋の教員が各地で迎えられ、更に理想的な中等予備教育機関である清華学校も開校するに至った。他方で日本側はというと、北京の淑慎女学堂の常田武子（生没年不明）女史のみは留まっていたが遠からず帰国してしまう状況となり、更に東京で留学生のために牧会に取組んでいた劉馬可（生没年不明）牧師も間も無く帰任する、と丸山は嘆く。従って「中国人青年会に中外諸氏の尽力はさることながら東部官私学校男女四千に近き支那の各省秀才の為に日本教界男女先輩の御一顧御加勢を願ひたきものに候」⁽¹²¹⁾と、直接的伝道とは多少の距離を置いた、人材育成の要を説くのであった。

また、1911年1月に開かれた北京在住日本人クリスチャン集会について報告する丸山は、宣教師による言を紹介するかたちで「日本は欧米

が異教徒救済の憐憫若くは自尊を動機として宣教師を派遣したりしとは趣を異にし宣教と云はずして友誼的応援使たるべし、日本より多額の金を投じ多数の人を送りて外国に宣教するは尚不可能なるのみならず不当行なりと思ふ、支那に人あり支那に金あり之をして起たしめ之をして動かしむれば足れり。有限の宣教師を送らんよりは幾多の善き日本のクリスチャンレーメンを国の内外に得て各方面より支那の良友たりにあり」⁽¹²²⁾、と述べた。

だが、一連の報告を注意して読み進めていくと、ある種の「挫折感」的な嘆きも同時に聴こえて来る。すなわち第五に、中国人伝道はいうに及ばず、对在留邦人伝道といった些細な次元においても表面化した「限界」について、である。例えば「此の一ヶ所のみが特に日本人の手に入り得べき性質を備へ、且つ百事経営上中々屈強の場所」だと伝道拠点としての候補物件が、「差当り三万円支払の道が問題にて空しく思ひ止らざるを得」なかったことを嘆き⁽¹²³⁾、欧米人宣教師たちは「資力裕かにして旅行交際も自由、秘書役補助者も有之候故、多くは文筆印刷物の力を藉りて中々の運動をなし、米支の関係にも斯教の伝道にも少からず貢献致し候に比し、小生の如きは甚だ顔色なき次第に候」と⁽¹²⁴⁾、資金力の不如意にも向き合っていたようだ。

そもそもは中国人伝道を目標として再度大陸へと向かった丸山ではあったが、北京時代における記録の中にも、残念ながら現地信徒との交わりが描き込まれていない。恐らく、叶わなかったのであろう。また、1911年7月には夫人と娘が腸チフスに罹患し、25日に長女・道子を失う悲劇にも見舞われた⁽¹²⁵⁾。その時期に満洲や華北を視察した日基伝道局幹事の貴山幸次郎による中間評価は、当時の彼を次のように語る。すなわち愛娘の葬儀に際して、「故人が生まれながらにして不思議に支那人を愛し又愛せられ、遂に先ず骨を此土地に埋むるに至りしことより大なる暗示を得たりとて自ら発奮し、今後益々当初の目的を達する為に努力す

べしと感謝して語」った感動的な姿。他方で「丸山氏目下の事業は、尚ほ予備時代に属し、直接伝道の集会或ひは受洗者等の数字を以て語るべき時機に達せず。然れども支那人牧師及び其の教会の顧問として、重大なる事件に関し常に其の意見を求められ、多大の尊敬を以て遇せられつゝあるのみならず、信者ならざる所謂有志家とも交りて彼らの間に重んぜられ居れり。故に少くも今十年を忍びて倦まずんば、必ず前途に確かなる光明を認むるに至るべし」と⁽¹²⁶⁾、冷徹なる観察も書き忘れなかった。

だがかかる実績にも関わらず1911年10月2日より開催された日本基督教会大会は、丸山の働きを重視する翌年度予算案を可決した。伝道局予算総額9000円の内、なんと1200円を「清国人伝道費」に配分したのである。自立前の教会を対象とした国内伝道費が1870円、台湾500円、朝鮮1260円、満洲700円という数値と比較しても、破格の好待遇が看取されるだろう⁽¹²⁷⁾。

※ ※

1911年後半になると、丸山の生産力は管見の限り激減する。その理由は私生活を襲った不幸にあるのかも知れないが、史料は何も語らない。翌12年にもこの状況に変化は見られないものの、任地たる中国において発生した政治変動の渦中に置かれていただろうことは、推測するに難くない。日本プロテスタント界は概ね革命派に好意を寄せており、聖書改訳委員として活躍していた川添萬壽得(1870～1938)が説く清国の「真の悔い改め」待望論⁽¹²⁸⁾、あるいは「凡ての動乱や革命は支那国民のうちに神の国が成就せられんが為めの準備に過ぎぬ。人民がその勢力を自覚し、自治の精神を發揮し国政を自ら行はんとするのは更に大なる靈の国に到達せん為の鍛錬教育である」⁽¹²⁹⁾といった旨の主張が繰り返された。

〈1912年〉

1912年の動向として報じられる出来事は、日本基督教界がこぞって追悼した明治天皇の葬儀に際して、北京でも式典が開催された報告くら

いである⁽¹³⁰⁾。だが、かかる「低調」とは裏腹に、この年10月10日から仙台で開かれた日基大会は、1913年度における「支那人伝道」のための予算を2000円に増額、特別指定献金をもって充当すると議決した⁽¹³¹⁾。総収入を15700円と見越した上での判断であるから、その厚遇振りが見えてくる。

〈1913年〉

こうした中であって1913年1月20日、丸山は帰国・上京した⁽¹³²⁾。革命後の現地動向を問うた『福音新報』記者に対して彼は、「国民的自覚に伴ふて伝道に意外の困難」が生ずる可能性はあるものの、「方法宜しきを得ば大なる効果を収むるに至らん」と、楽観的展望を述べる。そして「現に中華民国に関係ある人物中有力なる基督者も少なからず」と、孫文(1866～1925)・伍廷芳(1842～1922)・王正廷(1882～1961)・王寵惠(1881～1958)・顔惠慶(1877～1950)の名を挙げ、自らは目下「基督者たる支那人に対しては健全なる信仰と自治とを勧め、未信者には宗教道徳の切要を説き、専ら友人として支那人に接近しつゝ、個人的感化を及ぼすことに努めて居」る最中だとアピールした⁽¹³³⁾。

その筆頭格であり、辛亥革命後に全国鉄路督辦(鉄道大臣)に就任した革命「元勳」たるクリスチャン政治家・孫文は、1913年2月13日から3月23日にかけて、元勳・桂太郎(1848～1913)の招聘を受諾して日本を歴訪している。宮崎滔天(1870～1922)や梅屋庄吉(1869～1934)らが、長崎港に出迎えた事実などは良く知られており、国権的「アジア主義」と孫文との共鳴が演出されるような装置も支度されていた。ともあれ国賓待遇で迎えられ各界から注目された旅程であり、旧来の研究では経済支援や投資を期待した訪日と見做されている。だがこれは一方で、宗教色も帯びた訪問であった事実については、僅かに蔣海波が指摘しただけだろう⁽¹³⁴⁾。管見の限りこの期間、孫文は既知の東京・大阪の基督教青年会における講演の他にも、神戸と長崎で奨励を行った。

のみならず、これらに関係した人々について分析すると、舞台裏における丸山の働きが見て取られるのである。当時の各地新聞紙面に、その状況を探ってみたい。

1913年2月23日の神田YMCAにおける講演は、既に人口に膾炙している。ただ同日午前、同じ会場において中華民国日本留学生総勢2500人が参加した歓迎会が持たれ、昼食を挟んで会合が持たれた事実は、ぜひ押さえない。午後の歓迎会は、江原素六（1842～1922：メソ）・海老名弾正（1856～1937：組合）・新渡戸稻造（1862～1933：友会）・小崎弘道（1856～1938：組合）の発起であったと報じられる⁽¹³⁵⁾。「来会者は四百名ばかりで、支那青年も少なからず来会し、数名の外国宣教師も見えた」という式典は、東京Y総主事の山本邦之助（1869～1955：メソ）による司会、日本Y学生部主事の小松武治（1875～1964：不明）による聖書朗読、本郷中央会堂牧師の杉原成義（1870～？：メソ）による祈祷、当時まだ普連土女学校生徒だった佐藤千代子〔千夜子〕（1897～1968：メソ）による独唱の後、小崎弘道や衆院議員の根本正（1851～1933：メソ）・大日本海外教育会の押川方義（1852～1928：日基）とならんで、丸山傳太郎が祝辞を披露した⁽¹³⁶⁾。彼は先立つ2月12日に北海道へ向かっているので⁽¹³⁷⁾、とんぼ返りで馳せ参じた感がある。ちなみにその内容は、「支那伝道に自己が献身せし経歴談を初めとし、日本人の支那に対する職責、一昨年革命当時の尽力談など」であったという⁽¹³⁸⁾。これに続いて孫文の講演を戴季陶（1891～1949）が通訳、丸山が胡瑛（1884～1933）のスピーチを通訳した後、星野光多（1860～1932：日基）牧師の祝祷によって散会した。他の主な登壇者に比べて一回り以上も若い丸山傳太郎にとって、実に大きな晴れ舞台であったと言えるだろう。

史料の中に丸山が登場する会場は東京のみであるが、同じように大阪・神戸・長崎での状況も一瞥してみたい。

3月11日午後には大阪YMCAで開催された歓迎会は、邦人初の聖公会主教たる名出保太郎（1865～1945：聖公）による司式の下、天満教会牧師で梅花女学校長を兼ねた長田時行（1860～1939：組合）の祈祷、大阪教会牧師の宮川経輝（1857～1936：組合）による歓迎演説と報じられる⁽¹³⁹⁾。同じく、3月13日午後には神戸YMCAで開催された講演においては、浸礼会牧師の赤川潔（生没年不明：東バプ）による祈祷に続いて、青年会理事の森田金蔵（1866～1940：組合）による歓迎の辞があった⁽¹⁴⁰⁾。また帰国直前の3月22日午前には長崎YMCAで開催された式典の登壇者には、これまでのところ長崎Y理事の信徒伝道者であった菅沼元之助（1867～1922：メソ）や同主事のG.E.トルーマン（1880～1958：不明）の名が判明している⁽¹⁴¹⁾。また、信仰的な集會こそ開催されていないが、3月9日に入洛した孫文を囲む京都商業會議所主催の歓迎会列席者として、京都帝大に学ぶプリンス近衛文麿公爵（1891～1945）以下、京都市助役の加藤小太郎（1872～1935）、日銀京都支店長の結城豊太郎（1877～1951）、京都帝大教授の外交史家・末広重雄（1874～1946）らとともに、同志社大学長の原田助（1863～1940：組合）牧師、京都教会の牧野虎次（1871～1964：組合）牧師の名が挙げられていた⁽¹⁴²⁾。

読者諸賢は、如上の味気なく単調な叙述から、孫文来日をめぐる非常に大きな示唆を与えられたことだろう。すなわち第一に、各地の基督教青年会館が集會や講演の会場に選定されている事実。留日中華基督教青年会をはじめ、横の連携があったればこそ可能となった技である。第二に、丸山傳太郎が東京の講演会で大きな役割を果たしていた事実。「中国革命の父孫文と親交を結んだ」⁽¹⁴³⁾云々の漠然とした語りは、ここにおいて具体的内実の一端が明かされたのである。しかし第三に、大きな謎は残されたままだ。すなわち、孫文を同道した裏方の丸山は、日基によって北京に派遣されていた。然るに、東京での催しを除いて日基系の牧師

や関係者が孫文講演に積極的に関わった形跡が発見できないのである。無論、YMCA という超教派的組織が担っていたという見方も可能であろうが、いったいこれは何を意味するのか？

孫文は、長崎 YMCA での講演翌日に宋教仁暗殺で揺れる上海に向かい帰国した⁽¹⁴⁴⁾。丸山の場合、3月6日時点で「今週東京を發し京阪地方を経て北京の任地に帰らるゝ筈」⁽¹⁴⁵⁾であり、3月20日に「先週出發北京へ歸任せられたり」⁽¹⁴⁶⁾と報じられる通り、9日から始まった週に帰国しているので、大阪や神戸での立会については不明である。だが同時にわたくしたちは、丸山の古巣たる組合派メンバーが孫文による各地での講演に関与した大きさについても、豊かな気付が得られただろう⁽¹⁴⁷⁾。

受洗二年後に棄教したといわれるものの、宮崎滔天も若き日に徳富蘇峰（1863～1957）の大江義塾に学び、東京専門学校時代の1887年に小崎弘道から受洗している。また、孫文が最初に知り合った日本人は、ハワイ亡命時代の1894年に出会った菅原傳（1863～1937）牧師（後に政友会の代議士として活躍）であり、そこからの人的関係で滔天ら多くの日本人「同志」と結ばれた経緯も知られている⁽¹⁴⁸⁾。欧米ミッションによる東アジア伝道方針の動態、また日中両国で同時進行的に確認された自立化志向との関係性をも含む詳細な探究は後日の課題に設定したいが⁽¹⁴⁹⁾、信仰を媒介とする国際的ネットワーク形成は、たいへん興味深い現象であろう。

VI むすびにかえて—隣人「友遇」に向かって—

大役を終えて北京へ帰任した丸山傳太郎は、まもなく中国での活動に終止符を打たざるを得ない局面を迎える。その理由について日基の通史は「伝道の発展、資金の充実に就き計画する所ありしも意の如くならず

るを以て三月限り一時中止に決せり」と⁽¹⁵⁰⁾、伝道成績不振に理由を求めた。他方で、前出の貴山幸次郎による同時代記録の如き長期的視野に立つ期待感も存在していた訳であり、財政的な理由のみによる説明では納得できない部分も残るだろう⁽¹⁵¹⁾。

先ず、既に見た如く丸山が親しく交わった教界関係者は、孫文の系統に連なる人々が多い。辛亥革命が挫折して袁世凱（1859～1916）独裁へと向かう流れの中で、彼の現地における安全性は微妙となった。丸山執筆と見做される一連の記事は、袁世凱による反動的支配や弾圧を非難する⁽¹⁵²⁾。4月27日には東京において、YMCA 総主事・山本邦之助、天津日本人 YMCA 組織に着手したばかりの佐藤惣三郎（生没年不詳）のほか、「重立ちたる牧師有志信徒」が参加して、実質的に新生民国を支持する集会も持たれた⁽¹⁵³⁾。やがて革命派の人物も続々と海外に亡命、多くの者が日本へと向かう。孫文も8月4日に福州を脱出し、台湾・基隆を経由して9日には神戸へ到着している⁽¹⁵⁴⁾。加えて、9月に到ると袁世凱配下の張勳（1854～1923）による南京占領にともない在留邦人が掠奪等の被害に遭い、三人が虐殺された外交懸案も発生しており⁽¹⁵⁵⁾、丸山が急遽引き揚げた1913年の歴史的背景に言及しない論評は、余りにも不自然だ。

次に、孫文来日時状況から判明した通り、日基に限らず他会派とも交友を重ねた丸山の「超教派」的な姿勢が、教会合同議論の展開とも相俟って、様々な憶測を喚起した可能性もある。結果的に、非常に恵まれた丸山の「伝道経費」と比して見劣りする「伝道成果」が、北京撤退の無難な理由として選択されたのではないだろうか。

更に、かかる人物史研究とは異なる次元において、是非とも確認すべき問題がある。本稿で素描した丸山傳太郎が示す「中国」への情念は、決して彼一人だけの特殊な例でなかった事実だ。最後に、これについて簡単に纏めておきたい。

※ ※

例えば、日露戦争後の日本留学ブームを受けとめ、1906年春に中華留日基督教青年会が成立した。この小さき群れに対する関心は徐々に高まり⁽¹⁵⁶⁾、翌1907年1月17日には東京YMCA会館で記念式典が開催された。王正廷による司会の下、公使館関係者ほか、当時は早大商科留学生だった王治昌（1876～1956）、漢口YMCAより転じて総主事に就任したJ.M.クリントン [Jacob Mancil Clinton / 林徳芳]（1877～1969）や立教学院総理のヘンリー・タッカー [Henry St. George Tucker]（1874～1959）など500名余りが集う祝典だったというが、青山学院校長の本多庸一（1849～1912）や東京YMCA総主事の山本邦之助、また明治学院総理・井深梶之助の列席も報告されている⁽¹⁵⁷⁾。

1909年春には、東京Yと中華Yが協力して「支那留学生招待会」を開催、1000名余りを招いたという。此処には、メソジスト牧師の劉馬可（生没年不明）や東京市長の尾崎行雄（1858～1954）のほか、小崎弘道や新渡戸稻造、江原素六らの教界名士も参集していた⁽¹⁵⁸⁾。更に1912年10月12日の留日中華YMCA本部落成記念式典でも、大隈重信（1838～1922）、阪谷芳郎（1863～1941）ら政要とともに、壇上には新渡戸稻造、聖公会司祭の多川幾造（1862～1943）の姿があったという⁽¹⁵⁹⁾。

また、日清・日露による「新領土」獲得一即ち新たな宣教対象の拡大一を契機とした各会派による台湾・満洲、やがて朝鮮半島伝道のための組織、あるいは中会形成のほか、超教派的な「連帯」を意識する動きが発生していた事実にも注目したい。管見の限り、1905年11月にホーリネスの中田重治（1870～1934）やチャールズ・カウマン [Charles Elmer Cowman]（1864～1924）らが組織した東洋宣教会 [Oriental Missionary Society]⁽¹⁶⁰⁾、1907年5月に岡山孤児院などで活躍した石井十次（1865～1914）が日基大連教会脱退後の石田祐安とともに組織

した東洋伝道会などは⁽¹⁶¹⁾、かかる範疇に数えても良いだろう。

更に1909年8月、まさに丸山の北京赴任前夜において、「日本、支那及び朝鮮の基督教界の消息を通じ、互に気脈を交へて相援け、以て東亜国民の間に斯教の健全なる発達を期するの目的」を掲げて、東亜基督協会が設立された。1909年3月4日付『福音新報』紙上で発表された「清国の基督教—丸山傳太郎氏談話」と、基本的に同じ内容の構想であることに、瞩目されたい⁽¹⁶²⁾。後に天津『益世報』經理となる劉俊卿（生没年不明）、東京朝鮮基督教青年会の金貞植（1862～1937）、上海で電気関係貿易に従事した東京高商Y出身の高岩勘次郎（生没年不明）、天津在住中の吉野作造、韓国鉄道青年会の幹事となる今井熊次郎（生没年不明）、満鉄勤務に転じた日本Y同盟本部員の大塚素（1868～1920）、満洲・朝鮮経験が豊富な東京Y主事の山本邦之助、関東都督秘書官の高橋本吉（1873～1920）、新渡戸の弟子筋で台湾糖業研究所技師の石田研（生没年不明）、メソジスト三派合同後に『護教』主筆を勤めた青学教授の鶴崎庚次郎（1870～1930）が提案者となったこの組織は、東京Yに間借りした本部に加え、北京・上海・京城にも常設事務所を設置する計画を公にしていた⁽¹⁶³⁾。

これらを見ても判明する通り、この時代のキリスト教界においては、明らかに〈アジア志向〉の底流が確認できるのである。国家が働いた行為や可視化された〈悪〉に対する若干の後ろめたさを背景にしながら、〈アジア情結〉に近い気運が広がっていたと総括することも可能だろう。本稿で追跡した丸山の様々な活動も、決して彼一人によって為された技ではなく、かかる関係性の中で支えられながら展開していたことを、われわれは是非とも銘記しておきたい。

※ ※

だがいずれにせよ、丸山の中国生活は1913年7月下旬、乃至は8月上旬に突如として中断される⁽¹⁶⁴⁾。時に41歳であった。帰国後も略々

同じ長さの歳月を生きたにもかかわらず、これ以降の生涯の大半は現在でも未知のままだ。しかしながら、主なる神が与え賜うた〈時〉と〈場〉に置かれた丸山傳太郎は、その初志を放棄しなかったのである⁽¹⁶⁵⁾。大正・昭和前期の東京を舞台とした活動については、稿を改めて詳論したいと希う。

(了)

註

- (1) 「丸山傳太郎」(『信仰三十年 基督者列伝』 警醒社書店, 1921年11月) 133～134頁。なお、同書収録の史料は「紳士録」一般における叙述と類似しており、第三者による記録というよりは、寧ろ本人が申告したプロフィールを編集した可能性が高い。
- (2) 山本秀煌『日本基督教会史』(日本基督教会事務所, 1929年10月) 303頁、及び308～309頁, 441～442頁など。
- (3) 「満洲・北支」(佐波互編『植村正久と其の時代』第3巻, 教文館, 1938年4月) 307～353頁。
- (4) 比屋根安定『支那基督教史』(生活社, 1940年7月) 310～313頁。
- (5) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社, 1980年) 106～108頁。
- (6) 白井暢明『北海道開拓者精神とキリスト教』(北海道大学出版会, 2010年)。
- (7) 山口陽一「アジア太平洋戦争下の中国伝道」(『福音主義神学』第38号, 2007年)。
- (8) 中村敏『日本プロテスタント海外宣教史』(新教出版社, 2011年) 55～56頁。
- (9) 渡辺祐子「一九世紀末から日中戦争終結までの日本と中国の教会」(石川照子ほか『はじめての中国キリスト教史』 かんよう出版, 2016年) 145～147頁。
- (10) 最も典型的な事例として、木俣敏・編集部補「丸山伝太郎」は次の通り叙述する。「丸山伝太郎 1871.12.30-1951.10.2 牧師。兵庫県氷上郡柏原町出身。

丸山傳太郎の中国伝道をめぐって

1893年同志社神学校卒。早くから中国伝道の志を抱く。神学校在学中、同窓の志方之善と北海道後志国利別原野の開拓、インマヌエル村計画を立て、卒業と同時に一家を挙げて入植。開拓地にインマヌエル教会の設立をみた後、97年同地を去り、北海道集治監教誨師嘱託として各地を巡礼し、監獄改善に貢献。97-1903年札幌（札幌北光）、旭川（旭川六条）、元浦河などの日本組合基督教会牧師として伝道、03年日本基督教会伝道局の要請に応じて、長年の宿願であった中国伝道に派遣された。04年日露戦争が勃発すると、クリスチャン主計将校日正信亮の求めに応じてその通訳渉外官として活躍。その間、満州婦人救済事業、大連商業学校の設立、営口教会とその青年会後援など銃後の活動に尽力した。いったん帰国するが、09年日本基督教会の招請に応じて再び中国に渡り、日中両教会の伝道と友好に尽瘁。中国革命の父孫文と親交を結んだ。帰国後、東南アジア諸国留学生の援護に尽力。戦後はかつて開拓の鍬を下した北海道インマヌエルの地神丘に帰り、インマヌエル友の会を興し、利別教会の復興を助けた（鈴木範久編『日本キリスト教歴史人名事典』教文館、2020年、761頁）。基本的に旧版（『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年）と同一内容であり、大正から昭和敗戦後までの三十余年が僅か二十字で纏められているのである。

同様の現象については、松井拳堂『丹波人物志』（丹波人物志刊行会、1960年、338～339頁）や比屋根安定編『新・キリスト教辞典』（誠信書房、1970年、366頁）に収録された記述においても共通している。

- (11) この点について、例えば彼の所属等について追跡してみよう。教文館編『基督教名鑑』では組合派「インマヌエル教会」（1897）、「浦河講習所」（1898）と確認できる。1903年以降の動向は本文の通りであるが、帰国後は若干の注意を払うべきだろう。すなわち、『日本基督教会年鑑』各年度版によれば、「支那人伝道」として「四谷区須賀町34」に在住とある（1916～1919年度版）。続いて「北海道中会」の所属で「須賀町34」に在住（1924～1926年度版）、「北海道中会」所属の「休会」牧師で「牛込区山吹町74」に在住（1926～1932年度版）とあり、1933年度版以降には姓名が掲載されなくなっている。日本基督教

会同盟『教会便覧』を見ても、「支那北京」(1913年12月)から「北海道」(1914年12月)、次いで「東京四谷」(1915年12月)とある。他方で『日本基督教徒名鑑』(中外興信所、1916年2月、586頁)には「(組合派) インマヌエル教会名誉牧師」、『信仰三十年 基督者列伝』は北海道「インマヌエル教会」所属とあり、会派的な結びつきが稀薄化したことを暗示する如くである。

- (12) 例えば、秦孝治郎「同志社に育った人々」(同志社々史料編集所編『同志社九十年小史』学校法人同志社、1965年)は、丸山を留岡幸助や中村遙らとともに、「社会事業界」で活躍した人物だと位置づける(577頁)。また、晩年の回想録である牧野虎次『針の穴から』(牧野虎次先生米寿記念会、1958年)において丸山は、長田時行(1860～1939)・片桐清治(1856～1928)・留岡幸助(1864～1934)・西尾幸太郎(1868～1942)・奥村多喜衛(1865～1951)・曾我部四郎(1865～1949)・小北寅之助(1865～1932)・野口末彦(1867～1950)とともに、別科(邦語神学科)が生んだ精鋭であったと述べる(40頁)。更に近年の人物史研究の精緻化により、1889年夏に同志社で開催された第一回全国基督教夏期学校において、丸山は山室軍平(1872～1940)らとともに参加していた事実が判明している(室田保夫『山室軍平』ミネルヴァ書房、2020年、24～27頁)。他方、上野直蔵編『同志社百年史』通史編1・2(学校法人同志社、1979年)においては、管見の限り丸山については触れられていない。
- (13) 丸山の北海道時代については、「イマヌエル部落(神丘)の創設者」(今金町開拓回想録編集委員会編『今金町開拓回想録』今金町、1967年)の他、相良愛光編『日本基督教団利別教会の由緒と沿革』(日本基督教団利別教会、1966年)、木俣敏『悠久なる利別の流れ—日本キリスト教団利別教会百年史』(日本キリスト教団利別教会、1994年)に収録された各個教会史的な素材に加えて、白井暢明『北海道開拓者精神とキリスト教』(北海道大学出版会、2010年)における「今金・インマヌエル移住団体」に関する考察に詳しい。なお、日本初の女医として著名な荻野吟子の評伝である渡辺淳一『花埋み』(河出書房新社、1970年)においても、丸山は志方の盟友として登場している。

- (14) 吉野作造と丸山の関係を詳論した分析は少ないが、そうした中であって清水安三「第三号の序にかえて」（『桜美林大学中国文学論叢』第3号，1972年）は、天津時代の吉野作造は丸山の働きを助け「日曜毎に集会を営み、「教会といわず青年会（YMCA）と称して営んでおられたとも聞いたことがある」と回顧する（3頁）。両者共に面識・交流が深い清水の言として、記憶に留めて置きたい。
- (15) 李大釗と丸山については、朱文通「李大釗与基督教文化」（『河北師範大学学报—哲学社会科学版』第37卷第1号，2014年）、「“五四”前後周作人与李大釗往来考」（『唐山学院学报』第32卷第5号，2019年）がある。尚、清水安三も李大釗と最初に出会ったのは、大正初期の丸山学寮であったと回顧している（清水安三『石ころの生涯』第3版，キリスト新聞社，1982年，228～229頁）。
- (16) 例えば、田原洋『関東大震災と中国人』（岩波書店，2014年〔底本は三一書房，1982年〕）においても丸山について触れられるが、教界での「主役」は救世軍の山室軍平（1872～1940）に置かれた感がある。著者の父が救世軍メンバーだった関係であろうが、山室は同志社神学校時代に丸山と同窓であったという補助線も必要だろう。王と丸山など日本人クリスチャンとの交流については、陳鉄健「塵封半個世紀的“五四”先驅王希天」（『中共党史研究』1999年第4期）及び同「日本政府掩蓋大島町和王希天血案的真相」（『浙江社会科学』2000年第5期，2000年）も参照されたい。また、今井清一『関東大震災と中国人虐殺事件』（湖北社，2020年）は、当該問題に際する丸山らの働きが手際よく纏められた好著である。
- (17) 東京における孫文追悼会については、付敬元・盧立菊「1925年海外各界人士对孫中山的追悼」（『檔案与建設』2011年第10期，2011年）が詳細に伝えるも、丸山の追悼演説内容については触れていない。
- (18) この問題については、倉橋正直「モルヒネ密売を告発した日本人—阿片禁止の運動家・菊地西次」（同『阿片帝国日本』共栄書房，2008年）という労作があり、丸山の同労者であった菊地西次（1884？～1932？）について考察する。丸山を理解する上でも必読の論考である。

- (19) 例えば、問昕「偽滿時期的日系基督教」（『蘭台世界』2013年11月上旬号，2013年）や徐炳三『“扭曲”的十字架—偽滿洲国基督教研究』（科学出版社，2018年）において日疋の部下たる丸山が満洲伝道会に参加した旨を述べるも、具体的関与の内容については全く論ぜられていない。
- (20) 清水賢一郎「1924年自由学園を訪れた中国視察団」（『生活大学研究』第4巻，自由学園最高学部，2019年）は、人的関係の分析を含めて丸山など両国クリスマスチャン交流の実像に肉迫せんとした、たいへん意欲的な力作である。
- (21) 井深梶之助「社会改良の前途に就いて」（『井深梶之助とその時代』第二巻，明治学院，1970年）395頁。
- (22) 植村正久『信仰の友』（警醒社，1898年4月）39～42頁。
- (23) 「日匹氏の清国談片」（『福音新報』1902年2月26日）5～6面。
- (24) 「新島襄氏と支那」（『福音新報』1902年4月16日）4～5面。
- (25) 「支那改革の曙光」（『福音新報』1902年4月30日）4面。
- (26) 「上海教状」（『福音新報』1902年8月21日）13面。
- (27) E. M 生「北清の教勢」（『福音新報』1902年10月9日）5～6面，及び細川瀧氏述「北清の教勢(二)」（『福音新報』1902年10月16日）9～10面。なお，引用箇所は後者である。この華北滞在の詳細は目下不明であり，細川瀧『小鱗回顧録』（台南：加土印刷所，1927年6月）に当れば判明する可能性があるも，筆者は未見。
- (28) 「日本基督教会大会議事」（『福音新報』1902年10月16日）12～14面。
- (29) 「日本基督教徒の外国伝道」（『福音新報』1903年1月15日）1面。
- (30) 貴山生「清国天津通信」（『福音新報』1903年3月19日）14面。
- (31) 貴山生「北京の二日間」（『福音新報』1903年3月26日）13～14面。
- (32) 貴山幸次郎「清国伝道に付て」（『福音新報』1903年4月23日）1～2面。
- (33) 「丸山傳太郎氏の送別会」（『福音新報』1903年4月23日）11～12面。
- (34) 丸山傳太郎「留別の辞」（『基督教世界』1903年4月23日）4面。なお，丸山による原文には句読点が見られない場合も多いので，引用者がこれを随時補っ

丸山傳太郎の中国伝道をめぐって

た場合もある（以下の引用も同じく）。

- (35) 「彙報 丸山傳太郎」(『福音新報』1903年4月23日)12面,及び丸山傳太郎「天津短信」(『基督教世界』1903年5月14日)9面。
- (36) 「天津日本基督教会設立」(『福音新報』1903年4月9日)12面。
- (37) 貴山生「北支及滿洲伝道開始顛末略記」(『福音新報』1937年3月4日)6面。
- (38) 丸山傳太郎「天津通信」(『福音新報』1903年6月25日)13面。
- (39) 杉井六郎「松尾音次郎」(『日本キリスト教歴史大事典』教文館,1988年)1321頁,及び室田保夫「近代日本の社会事業雑誌—『教誨叢書』」(『関西学院大学人権研究』第15号,2011年)10～11頁。
- (40) 丸山傳太郎「天津通信(八月廿四日発)」(『基督教世界』1903年9月3日)9面,及び同「天津たより」(『福音新報』1903年10月1日)14面。
- (41) 「清国天津教会近況」(『福音新報』1903年11月12日)13面。
- (42) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1904年1月1日)13面。
- (43) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1904年1月21日)14面。
- (44) 「丸山傳太郎とその頃の北支伝道」(前掲『植村正久と其の時代』第3卷)329～330頁。
- (45) 前掲 貴山生「北支及滿洲伝道開始顛末略記」6面。
- (46) 「天津教会近況」(『福音新報』1904年1月14日)13面。
- (47) 『日本基督教会第拾九回大会記録』(1905年11月)20頁。こうした経緯からすれば,1903年時点における日正による丸山招請という認識には,微調整が必要となるだろう(松谷曄介『日本の中国占領統治と宗教政策』明石書店,2020年,148頁)。
- (48) 前掲『日本基督教会第拾九回大会記録』20頁。
- (49) 塩沢富太郎編「大連日本基督教会創立沿革史」(前掲『植村正久と其の時代』第3卷)313～314頁。
- (50) 金子は1902年9月17日付で東京砲兵工廠附(『官報』第5764号,1902年9月18日,314頁),1903年4月24日付で陸軍省経理局課員(『官報』第5941号,

1904年4月25日、514頁)に補されている。日露戦後においては、1908年4月28日付で第八師団經理部員陸軍三等主計正を免じ再び東京砲兵工廠附に補されているので(『官報』第7449号、1908年4月29日、692頁)日疋の部下であったと判明する。彼は、1906年8月に開かれた営口日本基督教会設立式典においても聖書朗読を担当する等、丸山とともに働く機会が多かった(「営口日本基督教会設立」、『福音新報』1906年9月6日、13面)。

- (51) 「青年会の天幕事業」(『基督教世界』1905年1月19日)1面。この他にも、旅順陥落の内因をロシア兵の飲酒過多に求める論考(「旅順陥落と酒」、『福音新報』1905年2月16日、8面)、戦勝後における継続の要を説く意見(蘆花生「旅順通信(第一信)」、『福音新報』1905年12月14日、12面)など、「酒」や「醜業婦」、そして「性病」に象徴される〈悪〉の根絶を主張する記事は多い。この点において、救世軍の活動とも通底した共通項が確認され、更に後の戦争に対する関与の在り方をも示唆するであろう。
- (52) 「営口通信」(『福音新報』1904年12月1日)13面。
- (53) 「日本基督教会伝道局の近況」(『福音新報』1905年2月23日)12面、瀬川浅「満洲遼東伝道旅行記(続)」(『福音新報』1905年9月7日)12面、益富政助「満洲だより」(『福音新報』1905年11月16日)13面。
- (54) 「満韓教勢一斑」(『福音新報』1905年12月28日)12面。
- (55) 瀬川浅「営口の伝道」(『福音新報』1905年11月2日)13面。
- (56) 『満洲軍倉庫業務報告』第1巻(満洲軍倉庫残務整理所蔵版、1907年5月序言)125頁。
- (57) 『満洲軍倉庫業務報告』第6巻、39～40頁。
- (58) 『満洲軍倉庫業務報告』第5巻、198～199頁。
- (59) 益富政助「満洲だより」(『福音新報』1905年11月16日)13面。
- (60) 『満洲軍倉庫業務報告』第5巻、200頁。
- (61) 『満洲軍倉庫業務報告』第5巻、938頁。
- (62) 「大連日本基督教会」(『福音新報』1906年5月3日)13面。

丸山傳太郎の中国伝道をめぐって

- (63) 『日本基督教会第貳拾壹回大会記録』(1907年11月)35頁。
- (64) 「個人消息 丸山傳太郎氏」(『基督教世界』1906年5月31日)8面。
- (65) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1906年5月31日)14面,「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1906年6月14日)14面,「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1906年6月28日)14面,及び「個人消息 丸山傳太郎氏」(『基督教世界』1906年7月5日)10面。
- (66) 大内三郎「ウイン」(『国史大辞典』第2巻,吉川弘文館,1980年)4頁。
- (67) これについては,中澤正七編『日本の使徒 トマス・ウキン伝』(長崎書店,1932年10月)119～124頁を参照。また,丸山自身の回想は丸山傳太郎「ウキン教師夫妻満洲渡来の回想」(柴田博陽『ウ井ン夫人伝』大連日本基督教婦人会,1913年8月)89～90頁による。
- (68) 丸山傳太郎「満洲音信」(『基督教世界』1906年5月10日)5面。
- (69) 「牛莊基督教青年会発会式」,「營口日本基督教会設立」(『福音新報』1906年9月6日)13面。
- (70) 速水生「満洲に於ける基督教事業の現状」(『基督教世界』1907年1月17日)9面。
- (71) 「營口通信」(『福音新報』1907年1月24日)13面。
- (72) 在牛莊領事窪田文三発外務大臣伯爵小村寿太郎宛「布教事業調査書送付ノ件」1908年12月16日(JACAR: B12081607000)。因みに丸山が營口で行動をとるにもする機会が多かった外交官・瀬川浅之進(生没年不明)領事は有力信徒であり(「營口基督教会」,『福音新報』1906年10月4日,12面),在外公館側と関係性は良好だったと思われる。
- (73) 「清国伝道開始第百年大会」(『福音新報』1907年5月9日)1～2面,「上海宣教師大会に於ける祖先崇拜」(『福音新報』1907年5月23日)1面,「上海宣教師大会の決議」(『福音新報』1907年5月30日)2面,「支那伝道開始百年大会」(『福音新報』1907年6月6日)14～15面。また,「清国伝道百周年大会」(『基督教世界』1907年5月30日)7面も,日本からの参加者が丸山一人であった事実から,彼の執筆だと推定される。

- (74) 丸山傳太郎「清国伝道開始第百年大会」(『福音新報』1907年6月27日)11面、及び同「支那伝道百周年大会側面観」(『基督教世界』1907年7月4日)9面。二つの記事とも細かい表現には異同があるものの、内容は概ね同一である。
- (75) ティモシー・リチャードについては、蒲豊彦・倉田明子監訳『中国伝道四五一年—ティモシー・リチャード回想録』(平凡社、2020年)があるので、参照されたい。
- (76) 丸山傳太郎「李博士の来朝」(『福音新報』1908年2月6日)11面。また同「李博士ノ来朝」(『基督教世界』1908年2月6日)8面、及び同「李博士と広学会」(『基督教世界』1908年2月13日)6面もあるが、内容は略々同一である。
- (77) 「大塚素氏満韓視察談」(『福音新報』1907年7月4日)13面。
- (78) 「上海日本基督教青年会」(『福音新報』1907年7月4日)13面。
- (79) 石原保太郎(談)「満洲の基督教」(『福音新報』1907年7月25日)13面。
- (80) 「満洲の教況」(『福音新報』1907年10月3日)14面。
- (81) 「奉天基督教教育有志会」(『福音新報』1907年11月7日)12～13面。
- (82) 「簡人消息 丸山傳太郎氏」(『基督教世界』1908年1月9日)9面。
- (83) 貴山幸次郎(談)「満韓教勢」(『福音新報』1908年6月11日)13面。
- (84) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1908年7月23日)15面。
- (85) 「個人消息 丸山傳太郎氏」(『基督教世界』1908年7月30日)9面。
- (86) 「奉天日本基督教会」(『福音新報』1908年8月6日)13面。
- (87) 貴山幸次郎(談)「満韓日本基督教会」(『福音新報』1909年1月1日)10面。
- (88) 『吉野作造選集』第13巻(岩波書店、1996年)74頁。
- (89) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1909年2月25日)15面、「個人消息 丸山傳太郎氏」(『基督教世界』1909年3月4日)10面。
- (90) 吉野と丸山の出会いは天津時代に遡ることが可能だと思われるも、「吉野日記」の欠落によりいまのところ検証できない。なお、前掲 清水安三「第三号の序にかえて」も参照のこと。
- (91) 前掲 山本秀煌『日本基督教会史』308頁。

丸山傳太郎の中国伝道をめぐって

- (92) 「第四 日本基督教会略史」(笹倉弥吉編『大正二年度 日本基督教会一覽』日本基督教会事務所, 1913年5月) 32頁。
- (93) 前掲『井深梶之助とその時代』第3巻, 180～183頁。
- (94) 「清国の基督教—丸山傳太郎氏談話」(『福音新報』1909年3月4日) 5～6面。
- (95) 「日本基督教会伝道修養会」(『福音新報』1909年3月25日) 12面。
- (96) 「彙報 丸山傳太郎氏」, 及び「彙報 貴山幸次郎氏」(『福音新報』1909年6月3日) 14面。
- (97) 「第七回日本基督教会北海道中会記録」(『日本基督教会北海道中会記録』新教出版社, 1983年) 25頁, 28頁。
- (98) 「札幌に於ける祝謝伝道」(『福音新報』1909年6月17日) 13面。
- (99) 「函館日本基督教会」(『福音新報』1909年7月1日) 14面。
- (100) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1909年4月1日) 15面。
- (101) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1909年6月17日) 14面。
- (102) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1909年9月9日) 14面, 及び「徳島日本基督伝道教会」(『福音新報』1909年9月16日) 13面。
- (103) 前掲 山本秀徳『日本基督教会史』324頁。
- (104) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1909年10月21日) 15面。
- (105) 前掲『井深梶之助とその時代』第3巻, 199頁。
- (106) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1909年11月4日) 13面。
- (107) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1909年11月19日) 14面。
- (108) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1909年12月20日) 15面。
- (109) 「昨年日本基督教会」(『福音新報』1910年2月17日) 11面。
- (110) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1910年8月18日) 15面。
- (111) 貴山幸次郎(談)「滿韓の教勢」④(『福音新報』1910年7月21日) 13面。
- (112) 「北京のくりすますと初週祈祷会」(『福音新報』1910年1月27日) 12～13面。
また同「北京教会雜俎」(一)(『燕塵』第3年第4号, 4月1日) 192～195頁。
- (113) 丸山傳太郎「北京教会雜俎」(三)(『燕塵』第3年第6号, 1910年6月) 320

～ 321 頁。

- (114) 丸山傳太郎「北京教会雜俎」(四) (『燕塵』 第3年第7号, 1910年7月) 374
～ 375 頁。
- (115) 丸山傳太郎「ウイリヤム, マーテン博士」(『燕塵』 第3年第5号, 1910年5月)
238～241 頁。
- (116) 丸山傳太郎「テモシー, リチャード博士」(『燕塵』 第3年第8号, 1910年8月)
399～400 頁。
- (117) 丸山傳太郎「テモシー, リチャード博士」(五完) (『燕塵』 第5年第12号,
1910年12月) 675～676 頁。
- (118) 丸山生「リチャード博士故令夫人」(『燕塵』 第6年第1号, 1911年1月) 23 頁。
- (119) 丸山傳太郎「支那伝道大会」(『福音新報』 1911年1月12日) 10 面。
- (120) 丸山傳太郎「北京通信」(『福音新報』 1911年3月2日) 13 面。
- (121) 丸山傳太郎「北京教界事情」(『福音新報』 1911年5月25日) 8 面。
- (122) 丸山傳太郎「北京通信」(『基督教世界』 1911年2月16日) 10～11 面。
- (123) 丸山傳太郎「北京のくりすます」(『福音新報』 1911年3月2日) 10 頁。
- (124) 前掲「北京教会事情」(1911年5月25日) 9 頁。
- (125) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』 1911年8月3日) 13 面。
- (126) 貴山幸次郎(談)「北京及び天津」(『福音新報』 1911年8月17日) 14 面。
- (127) 「日本基督教会大会記事」(『福音新報』 1911年10月12日) 10 面。
- (128) 川添萬壽得「隣邦の産の苦」(『福音新報』 1911年12月7日) 1～2 面。
- (129) 「今日の支那」(『福音新報』 1912年2月22日) 8 面。
- (130) 「北京日本基督教会」(『福音新報』 1912年9月19日) 14 面。
- (131) 「日本基督教会大会通信」(『福音新報』 1912年10月17日) 12 面。
- (132) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』 1913年1月23日) 13 面。
- (133) 「支那の基督教」(『福音新報』 1913年1月23日) 11 面。
- (134) 蔣海波「東京, 大阪基督教青年会館での孫文演説文の発見」(『孫文研究』 第
16号, 1994年), 及び同「孫文のキリスト教理解と大亜細亞主義—東京, 大阪

丸山傳太郎の中国伝道をめぐって

キリスト教青年会館での演説をめぐって」(『孫文研究』第23号, 1998年)。

- (135) 「春秋会と孫氏」(『時事新報』1913年2月24日)5面。
- (136) 「孫逸仙氏歓迎会」(『福音新報』1913年2月27日)11面, 「孫逸仙一行歓迎会」(『開拓者』第8巻第3号, 1913年3月)57頁など。
- (137) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1913年2月20日)13面。
- (138) 「孫逸仙氏一行歓迎会」(『基督教世界』1913年2月27日)9面。
- (139) 「大阪基督教徒の孫逸仙氏歓迎演説会」(『基督教世界』1913年3月13日)9面。
- (140) 「孫逸仙氏一行来る」(『神戸又新新聞』1913年3月14日)3面。なお, 講演内容の要旨についても, ここで報じられている。
- (141) 「滞在中の孫氏」(『東洋日の出新聞』1913年3月23日)2面, 「滞在中の孫文氏」(『長崎新聞』1913年3月23日)2面, 及び「孫文歓迎彙報」(『長崎日日新聞』1913年3月23日)2面。何れの記事も, 戴季陶の通訳によって行われた孫文講演「世界の平和と基督教」の内容も掲載している。
- (142) 「孫文氏歓迎会」(『京都日出新聞』1913年3月10日)3面, 及び「入洛後の孫文氏」(『大阪時事新報』1913年3月11日)1面。
- (143) 前掲 木俣敏・編集部補「丸山伝太郎」761頁。
- (144) 「東西南北 孫逸仙氏の帰国」(『福音新報』1913年3月27日)14面。
- (145) 「彙報 丸山傳太郎氏」(『福音新報』1913年3月6日)12～13面。
- (146) 「個人消息 丸山傳太郎氏」(『基督教世界』1913年3月20日)10面。
- (147) 孫文自身も, 1883年冬にアメリカ会衆派(香港美国公理会)の牧師から受洗している(譚啟見「孫中山と基督教的關係」, 『中国神学研究院期刊』第51期, 2011年, 28頁)。
- (148) 山根幸夫「孫文とキリスト教」(『史論』第41号, 1988年)6頁, 及び張家鳳『中山先生と国際友人』(秀威資訊科技, 2018年)514～519頁など。
- (149) 前者についていえば, 例えばメリマン・ハリス [Merriman Colbert Harris] (1846～1921) 監督は日露戦争時, 「進んで朝鮮支那の暗黒場裡に福音を宣伝すべく, 將た飢渴生命ある基督教を要求しつつある日本社会にも盛んに伝道す

べき」ことを「靈的戦争」の目的だとする（「講壇と演壇」、『福音新報』1905年3月2日、16面）。

- (150) 前掲 山本秀煌『日本基督教会史』441～442頁。
- (151) 後の総括であるが佐波互（1881～1958）は、1928年8月9日の北京について記した旅行記中で次の如く嘆いた。日基の教会が「無牧、無指導」かつ「何もやつてゐない」現実を目にして、「その昔逸早く丸山傳太郎氏夫妻を送り、また富士見町教会では、毎月一度、支那の伝道のことを、その祈祷会で、おぼえてゐたのに、こんなことでは真に惜しい話。遺憾なことでもある」と（佐波互「北支への旅日記」、『植村正久と其の時代』第3巻、348頁）。
- (152) 「中華民国と基督教」（『福音新報』1913年4月24日）11面、「中華民国政府の宗教政策」（『福音新報』1913年5月1日）11面、「支那政府に対する人道問題」（『福音新報』1913年8月7日）11面。
- (153) 「中華民国のための大祈祷会」（『基督教世界』1913年5月1日）8面。
- (154) 松井政務局長ヨリ安楽警視總監・岡部警保局長宛「日本ニ亡命ノ中国第二革命関係者ニ関スル調査書送付ノ件」1913年9月23日（外務省編纂『日本外交文書』大正二年第二冊、1964年）425～428頁など。
- (155) 原生（戌吉）「時事だより」（『福音新報』1913年9月11日、1面）は、当該事件を利用した対外硬を厳しく戒める内容となっており、一面トップに時論が採用された本当に珍しい事例である。なお、『福音新報』編集に長年従事した原については、拙稿「『原生』とは誰なのか？—キリスト教界・治安維持法・一九二五年」（『キリスト教文化』第10号、2017年）を参照されたい。
- (156) 「華人青年会」（『福音新報』1906年8月16日）12～13面。
- (157) 「中国青年会記念会」（『福音新報』1907年1月17日）13～14面。
- (158) 齊藤実『東京キリスト教青年会百年史』（東京キリスト教青年会、1980年）547～548頁、及び江原素六先生記念委員編『基督者としての江原素六先生』（東京基督教青年会、1922年）172頁。
- (159) 「東京中国基督教青年会会館落成礼」（『福音新報』1912年10月17日）14面。

丸山傳太郎の中国伝道をめぐって

- (160) 東洋宣教会については、米田勇『中田重治伝』（中田重治伝刊行会、1959年）147～154頁、及び中村敏『中田重治とその時代』（いのちのこば社、2019年）57～59頁などを参照。
- (161) 「岡山県基督信徒大会」（『基督教世界』1907年5月30日）11面。また、石井記念協会『石井十次伝』（石井記念協会、1934年4月）132～133頁、柴田善守『石井十次の生涯と思想』（春秋社、1964年）156～166頁、及び室田保夫「石井十次と東洋救世軍」（『キリスト教社会問題研究』第46号、1998年）117～125頁も参照。
- (162) 前掲「清国の基督教—丸山傳太郎氏談話」（『福音新報』1909年3月4日）5～6面。
- (163) 「東亜基督教協会」（『福音新報』1909年8月26日）14面。なお、記事原文では劉駿卿と記されているが、筆者はこれを劉俊卿と推定した。
- (164) 「彙報 丸山傳太郎氏」（『福音新報』1913年8月7日）13面。また、前掲 警醒社編『信仰三十年 基督者列伝』134頁、及び前掲 比屋根安定『支那基督教史』312頁も参照。
- (165) 後の丸山の人生を意識した場合、帰国早々に発表された論説で極めて予告的な内容が語られおり、興味深い。丸山傳太郎「在日本支那人留学生につきて」（『福音新報』1903年9月4日）10面、及び「支那及び朝鮮の留学生」（『福音新報』1903年9月4日）11面。

附録 丸山傳太郎による著作一覧（初稿）

1903年

「留別の辞」、『基督教世界』4月5日、4面。◎

「天津通信」、『基督教世界』5月14日、9面。◎

「天津通信」、『福音新報』6月25日、13面。◎

「天津通信（八月廿四日発）」、『基督教世界』9月3日、9面。◎

「天津たより」, 『福音新報』 10月1日, 14～15面。◎

1906年

「満洲音信」, 『基督教世界』 5月10日, 5面。○

1907年

「清国伝道開始第百年大会」, 『福音新報』 5月9日, 1～2面。△

「上海宣教師大会に於ける祖先崇拜」, 『福音新報』 5月23日, 1面。△

「上海宣教師大会の決議」, 『福音新報』 5月30日, 2面。△

「清国伝道百周年大会」, 『基督教世界』 5月30日, 7面。△

「支那伝道開始百年大会」, 『福音新報』 6月6日, 14～15面。△

「清国伝道開始第百年大会」, 『福音新報』 6月27日, 11～12面。◎

「支那伝道百周年大会側面記」, 『基督教世界』 7月4日, 9～10面。◎

1908年

「李博士の来朝」, 『基督教世界』 2月6日, 8面。◎

「李博士の来朝」, 『福音新報』 2月6日, 11～12面。◎

「李博士と広学会」, 『基督教世界』 2月13日, 6面。◎

1909年

「清国の基督教」, 『福音新報』 3月4日, 5～6面。○

1910年

「北京のくりすますと初週祈祷会」, 『福音新報』 1月27日, 12～13面。

○

「清国直隸省基督教聯合会」, 『福音新報』 3月24日, 15面。○

「北京基督教聯合大会」, 同上, 15面。○

「北京公理会の社会的活動」, 同上, 15～16頁。○

「在北京基督者日本人の集会」, 『福音新報』3月31日, 14面。○

「北京教会雜組—北京の『くりすます』と初週祈祷会・直隸省基督教聯合議會」, 『燕塵』第3年第4号, 4月1日, 192～195頁。◎

「ウィリヤム, マーテン博士」, 『燕塵』第3年第5号, 5月1日, 238～241頁。◎

「北京教会雜組(二)—北京基督教聯合会季会」, 同上, 264～266頁。◎

「北京教会雜組(三)—緑日伝道・日曜学校・京都中国青年会」, 『燕塵』第3年第6号, 6月1日, 319～321頁。◎

「北京教会雜組(四)—廟場傷道・音楽会・運動会・中外教士の英国行・両陳君の遊学・夏季学校」, 『燕塵』第3年第7号, 7月1日, 372～375頁。

◎

「テモシー, リチャード博士」, 『燕塵』第3年第8号, 8月1日, 399～400頁。◎

「テモシー, リチャード博士」(二), 『燕塵』第3年第9号, 9月1日, 488～491頁。◎

「テモシー, リチャード博士」(三), 『燕塵』第3年第10号, 10月1日, 574～577頁。◎

「テモシー, リチャード博士」(四), 『燕塵』第3年第11号, 11月1日, 634～637頁。◎

「テモシー, リチャード博士」(五完), 『燕塵』第3年第12号, 12月1日, 671～676頁。◎

1911年

「リチャード博士及故令夫人」, 『燕塵』第4年第1号, 1月1日, 22～26頁。◎

「支那伝道大会」, 『福音新報』1月12日, 27～28面。○

「北京のくりすます」, 同上, 28面。○

「北京通信—北京十一日会 (日本人基督教有志会)」, 『基督教世界』 2月16日, 10～11面。◎

「北京通信—北京のクリスマス・滙文大學堂卒業式」, 『福音新報』 3月2日, 13面。○

「北京教会事情」, 『福音新報』 5月25日, 8～9面。○

1912年

「支那滞留中のエリオット博士」, 『基督教世界』 6月27日, 7～8面。◎

1913年

「支那の基督教」, 『福音新報』 1月23日, 11面。○

「中華民國と基督教」, 『福音新報』 4月24日, 11面。△

「中華民國政府の宗教政策」, 『福音新報』 5月1日, 11面。△

「支那政府に対する人道問題」, 『福音新報』 8月7日, 11面。△

「支那に於ける教会聯合の傾向」, 『福音新報』 8月14日, 11面。○

「支那の基督教的刊行物」, 同上, 11面。○

「基督教の諸学校」, 同上, 11面。○

「国民運動」, 同上, 11面。○

「支那の日曜学校」, 同上, 11面。○

「ウキン教師夫妻満洲渡来の回想 (5月5日)」, 柴田博陽『ウ井ン夫人伝』大連日本基督教婦人会, 8月?日, 89～94頁。◎

「在日本支那留学生につきて」, 『福音新報』 9月4日, 10面。◎

「支那及び朝鮮の留学生」, 同上, 11面。△

1914年

「支那へ支那へ！—伝道準備十年」, 『新人』第15卷第11号, 11月1日,

62～64頁。◎

1917年

「日本継続委員の上海行」, 『護教』4月20日, 5～6面。◎

「ウイリヤム・マーテン博士(丁躋良先生)を憶ふ」, 『護教』5月4日, 4～5面。◎

1922年

「留學生の良友としての高橋君」, 溝口悦治編『高橋本吉君追想録』私家版, 9月15日, 313～317頁。◎

1923年

「大島 十一月九日 丸山大迫兩人大島行中国労働者被害事件調査八丁目惨殺ノ件」11月9日, 今井清一監修『史料集 関東在震災下の中国人虐殺事件』明石書店, 2008年10月, 134～136頁。△

丸山傳太郎・河野吉・小村俊三郎「支那人被害ノ実情踏査記事」11月, 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第55巻, 渋沢栄一伝記資料刊行会, 1964年5月, 251～255頁(今井清一監修『史料集 関東在震災下の中国人虐殺事件』明石書店, 2008年10月, 136～140頁にも収録)。△

1924年

「(校友欄)無題」, 『同神期報』第2号, 1月15日, 2頁。○

松岡均平・大倉喜七郎・丸山傳太郎「寄附申込書」及び「丸山翠松寮家屋並設備説明書」3月, 前掲『渋沢栄一伝記資料』第36巻, 1961年3月, 137～138頁。◎

1928年

「国際友誼 = 国際正義と国際同情」, 『日支関係』私家版, 10月?, 4
～10頁。◎

1930年

「留学生友遇後援会経費予算表」2月?, 前掲『洪沢栄一伝記資料』第
36巻, 1961年3月, 143～145頁。△
長尾半平・丸山傳太郎「無題(礼状)」6月, 前掲『洪沢栄一伝記資料』
第40巻, 1961年11月, 543頁。△

1931年

「蔣介石一彼をめぐる人々とその宗教的雰囲気」上, 『読売新聞』2月1
日, 朝刊, 4面。◎
「蔣介石一彼をめぐる人々とその宗教的雰囲気」下, 『読売新聞』2月3
日, 朝刊, 4面。◎
「(阿片害毒防止会)趣旨書」, 日本阿片害毒防止会常務理事丸山伝太郎
から文化事業部長坪上貞二あて「中華拒毒会大会行旅費補助申請書」10
月4日(アジア歴史資料センター Ref: B05015664900)。△

1932年

「財団法人留学生友遇会寄附行為(案)」, 12月28日(アジア歴史資料
センター Ref: B05016153200)。△

1937年

「支那要人の信仰(一)孫文」, 『読売新聞』1月5日, 朝刊, 5面。◎
「支那要人の信仰(二)蔣介石」, 『読売新聞』1月7日, 朝刊, 5面。◎
「支那要人の信仰(三)宋美齡等」, 『読売新聞』1月8日, 朝刊, 5面。◎

「支那要人の信仰(四) 孔祥熙」, 『読売新聞』1月9日, 朝刊, 5面。◎

「支那要人の信仰(五) 王正廷等」, 『読売新聞』1月10日, 朝刊, 5面。◎

1938年

「家庭学校より同志社への牧野先生を送る」, 『人道』第63号, 8月15日, 3面。◎

小崎道雄・丸山傳太郎「弔辞」, 8月19日, 山本芳太郎編『西崎弘太郎先生』東京女子薬学専門学校, 1940年10月, 45頁。△

1942年

小崎道雄・丸山傳太郎「弔辞」, 8月11日, 堀岡正家編『工学博士浅野応輔先生伝 附浅野春子夫人の追想録』工学博士浅野応輔先生伝記編集会, 1944年9月, 468～469頁。△

(註) 末尾に付した記号について, ◎は署名記事, ○は手紙や談話を編集者が整理した記事, △は共著並びに丸山傳太郎が執筆した可能性が高い文章を意味する。本稿においては, 主に1913年までの著作を史料として利用した。遺漏や誤記などについて, 各位のご助言を期待している。

【謝辞】

本稿執筆に先立つ史料蒐集において, 同志社大学神学部研究室・同志社大学人文科学研究所・中央研究院近代史研究所郭廷以図書館, 及び国立国会図書館関西館のお世話になった。特に記して, 関係各位に心より感謝を申し上げたい。